

暗殺教室～自分のスタンドは暗殺向きです～

ナメクジとカタツムリは絶対認めない

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしもエンドのE組に『スタンド使い』がいたら？そんなお話です。

目次

遭遇の時間	1
決断の時間	4
編入の時間	10
決闘の時間	16
能力の時間	21
修学旅行の時間	27
トラブルの予感	31
追跡の時間	37
自分の時間	42
その後の時間	50
転校生の時間	54
標的の時間	59
自律の時間	62
病みの時間	74
ビッチの時間	84
師匠の時間	89
二人目の時間	99
イトナと戦おう！の時間 その一	110

遭遇の時間

「いらっしやいませー」

午後9時頃、コンビニに無気力な少年の声が聞こえる。

彼の接客態度は、お世辞にも良いとは言えないものだった。

「あー……早く10時になんねーかなあ〜ッ」

少年は無意識のうちに時計を見る。目の前に客が居るにも関わらず、そんなことをぼやく。

(10時になったら何かひとつこのコンビニの商品をタダで貰える：金欠気味の中学生的にはスゲー助かるぜ〜)

「あ〜……」 いつのまにかカウンターに立っていた客に呼びかけられる。

「つと…すみませんね」

急いで少年はカウンターに並べられた商品を手取る。

(うおお…ッ！これは…ッ)

その商品は俗に言う「エロ本」であった。コンビニのバイトとは言え、少年は思春期の子供。まだ見ぬ秘境に動揺しそうになる。だが、今はバイト中。鋼のメンタルで乗り越えていく。

(こんなサングラスとマスク着けてよお〜そんなに身バレしたくないのかね?)

目の前の男を改めてよく見てみる。2メートル近くある身長。身をすっぽりと隠すコート。さらに、ハットまでかぶっている。

(…まっ、いいか！この客が帰ったらちよーど10時だ！さっさと帰ってもらうぜ！)

「身分証明のため、画面にタッチをお願いします」

画面に表示される「18歳以上ですか?」という文字。その文字に一瞬の迷いもなく伸ばされる男の手。そして……

『黄色のナニか』が、画面をプニョンと押した。

「……………はあ?」

少年は一瞬にして困惑する。

(なっ…んだ今の!?。一体何だ、こいつは? いや、そもそもこいつは人間なのか? なんかヤバそうだッ! ここは気付かないフリをしていよう…)

「ありがとうございます、千円お預かりします」

目の前の男は自分の求めていた物が手に入る興奮のあまり、少年が動揺している事に気づいていないようだ。少年は冷や汗をかきながらも内心安堵する。

(ベネー! 一時はどうなる事かと思っただがよお〜これでなんの問題も無くこの『トラブル』を切り抜けられるぜ!)

少年は落ち着いてレジスターからお釣りを取り出していく。

「360円のお釣りです。」

と、『黄色のナニか』に手を添えてお釣りを渡す。

「あ」 「あ」

瞬間、その場に静寂が訪れる。

(マズイマズイマズイ! なんつーマヌケな事してんだ俺はあ!?。どうすりゃいい!?。この後どうすりゃ正解になるんだ!?。)

少年が汗を滝のように流していると、目の前の男が、

「お、お釣りはいりませー! ー! ー! ー!!?。」

と猛スピードで走り去っていった。 ……エロ本を大事そうに抱えたまま。

「…何だったんだありゃあ?。」

少年は座り込みながら頭を落ち着かせる。それと同時に、

「鷹田くーん、もう帰っても…何してんの?。」

店長が少年に疑問をぶつける。しかし、さっきまでの出来事が頭から離れない少年はおぼつかない足取りで、目当ての商品を貰って帰って行った。

その頃、ある学校では……………

「あのう……鳥間先生……」 「……何だ」

「一般人に私の姿を見られた……って言ったらどうします?」

「はあ!? お前……本当に言っているのか!?」

「にゅやーち、違うんです! 長年探し求めていた秘宝がようやく手に入ったのでつい気が緩んでしまったんですよ!」

「はあ……もういい、こっちでその一般人を探す。特徴は何だ?」

「えっと……頭に編み込みがある赤い……」

教室で二人の教師が話していた。一人は目つきの鋭い軍人のような雰囲気を持った男。そしてもう一人は、エロ本を大事そうに抱えた黄色いタコのような生物だった。

決断の時間

銃悟 side

どうも！俺の名前は鷹田 銃悟（たかだ じゅうご）！突然だけど俺の目の前にはなんか防衛省のヤバそうな人と黄色いタコみたいな化け物がいるよ！な…何を言ってるのかわからねーと思うが（以下略）

……ふう、落ち着こう、なんでこんな状況になってるかだつて？
ああ…あれは三十分前のことだった………

三十分前

「ああ〜！忘れてたあ〜！」

朝7時、銃悟はベッドから飛び起きる。そして、机の上にある、紫色のリボルバー型の銃を手に取る。そうして流れるようにシリンダーに呼びかける。

「おおい！すまねえ！『朝ご飯』の時間だぞオーーツ!!」

一般人がこの場面を見ると間違いなく「こいつ、頭がイかれてやがる」と驚くだろう。しかし！銃悟の呼びかけたシリンダーの6つの銃倉から、

《グギャギャアーツ！メシダアーーーーーツ!!?》

《ヨウヤクメシカヨオーーーーーツマクタブレタゼエーツ》

《昨日ノ『晩ご飯』モ忘レテタシヨオーーーーーツシツカリシロヨオーーーーーツ！》

《ウエエエエエン、モウジューゴハ俺タチノ事ヲ忘レタノカトオモツタヨオオーーーーーツ》

《早くメシクレエエエエエツ》

《ジャンートイザツテ時ニ『お仕事』シテヤンネエーカラナアーツ》

頭が銃弾のような形をしている、体長7センチ程度の小人が六体、勢いよく飛び出してきた。

「悪かったって、『ピストルズ』！今からやるからなあ〜ッ！NO5！俺がお前らのことを忘れる訳ないだろお〜？だから泣くなつて〜ッ」自分の数十倍は小さい小人たちに非難され、銃悟はタジタジになる。

急いで昨日のバイトの報酬で貰ったサラミを手取る。そして、六枚のサラミを六体の小人たちに近づけていく。

「ほお〜らッ！俺が昨日汗水流して稼いだサラミだぞお〜ッ！よお〜くッ！味わって食べてくれよなあ〜ッ！」

（アアギヤアアアツウメエ〜〜〜ッ！）

小人たちの脅威の食欲によってあつという間にサラミがすべて無くなつていった。

（美味カツター〜〜〜ッ！）

「おいおい、もうちよつと味わつて《ジューゴ！『お昼寝』シテモイイカア〜ッ？》：お前らなあ〜ッ、今起きたばっかだろーがッ！『生活リズム』は崩したらダメだろお〜ッ？」

銃悟は小人たちに生活リズムの大切さを教えようとする。：が、

《イヤツタア〜〜〜ッ！『お昼寝』ダア〜〜〜ッ！》

《エツ!?『お昼寝』ダトオオオ〜〜〜ッ！》

《野郎ドモオ〜〜〜ッ！今カラ寝レルツテヨオ〜〜〜ッ！》

小人たちは銃悟の話には耳を傾けず、一目散にシリンダーに戻つていった。

「あッ！おい！『ピストルズ』！話はまだ終わつてねーんだぜ〜ッ！あつコラッ！戻るんじゃあないッ！」

銃悟は必死になつて引き止めるが、心の底ではこうやって引き止めでも無駄だとわかつているので、諦めて自分も『朝ご飯』を食べるために、朝食の準備をする。机の上に、トーストとハムエッグを載せた皿を置く。

「いただきます…」

トーストに齧り付きながら銃悟は昨日の奇妙な出来事を振り返る。（なんだつたんだ〜あの怪しいヤツは？タッチパネルを押す時や、お

釣りを渡す時のヤツの手は、確かに『黄色いナニか』だった……どう言うことなんだくツ？もしかしてヤツが月を七割ぶつ飛ばした張本人……てか？)

数週間前、突如月の七割が蒸発した。世界的なニュースとなったが、未だに原因らしい原因は見つかっていない。……それ以前に、この銃悟という少年、月が蒸発した事に、あまり興味を持っていない。ただ、楽しい生活が送ればいいだけだった。

(もしかしたら口封じのためにこの家まであのモンスターが……なーんて！ある訳ねーよな！来たとしても俺と『ピストルズ』が返り撃ちにしてやるぜくツ)

銃悟はトーストを啜えたまま、その場で銃を撃つ真似をする。

「……何やってんだ俺」

冷静になり、自分のした行動に恥じらい、静かに朝食の片付けをしていく。すると、

ピンポーン！

銃悟の家のチャイムが鳴る。

「はいはい！今出ますよおくツ！」

皿洗いを中断して、急いで玄関に行く。そして、躊躇なくドアを開ける。そこには、目つきの鋭い、落ち着いた雰囲気を持った青年がいた。

「はいー、何の用ですかねー？」

「朝早くからすまない。俺はこういう者だ」

目の前の青年から、名刺を渡される。そこには、

『桐ヶ丘中学校教師 烏間 惟臣』……？

と書かれてあった。

「そして私の名刺もどうぞ」

さらにその青年の横から素早く黄色いナニかが名刺を渡してきた。

「はあ……どうも……ん？」

その名刺には、

『桐ヶ丘中学校 三年E組担任教師 殺せんせー』……??」

と、そう書かれていた。さらに、その横には黄色いタコのような生

物が笑っている絵が描かれてあった。

「??? 中学校の先生方がなんで俺の家に来てうおおおおお!?」

名刺から顔を上げて疑問の顔を浮かべる銃悟だったが、すぐに驚愕の顔に変わる。何故なら……………

「ヌルッフッフ。昨日振りですねえ、『鷹田 銃悟』君?」

黄色いタコのような生物が立っていたからだった。

「……………すまない、この怪物を昨日見たという情報が入ったんだ。……………こいつ自身からな」

「……………」

「とりあえず、中に入れて貰ってもいいか?」

「……………ドウゾ……………」

錆びたブリキ人形のように、銃悟は頷いた。

く冒頭に戻るく

銃悟 side

……………つて言うわけなんだよ。突然過ぎて何が何だかわかんねーけどよおろツ、この烏間っていう人の話を聞けばこういうことらしい。

・この黄色いタコは月を七割蒸発させた張本人

・何故か柵ヶ丘中学校三年E組の担任をしている

・正体を知ってしまった俺は記憶を消されるか三年E組に編入して

このタコを『暗殺』しなければならぬ

……………三番目の記憶を消されるってなんなんだ? コエーよおろツ、でもよおろ、『暗殺』つて言ったってそれに見合った報酬がねーと「報酬は百億円だ!!」ツ!!?!!い…今こいつなんつた? ひ…ひ…

『百億円』だとおおーッ!!?!!」

オイオイオイオイ! 冗談抜きで言ってるのかあーッ? 『百億』なんてあったら一生遊んで暮らせるじゃねーか! これはもう……………

「この話を聞いてどうするのは君の自由だが…俺個人としてはこの

暗殺に参加してほしくないと思っている」

「……………多分この鳥間って人は本気で俺の心配をしてくれている。……………気になることがひとつ出来た。」

鳥間 side

今俺の目の前にいる鷹田銃悟という少年は考えている。この歳頃で百億円という言葉に釣られていないこの冷静さ、暗殺者に欲しい……………が、人ではないとは言え、『生物』を殺すんだ、まだ14歳の少年には……………「なあ、ひとつ聞いていいか?」

「……………なんだ?」何かわからないことがあったのか?

そのまま目の前の少年は続ける。

「いや、鳥間さんじゃあない、その殺せんせー…だっけ?アンタだ。アンタに『質問』がある」

「……………なんだ?コイツに質問だと……………何を質問するんだ?」

「はい、どうぞ?」

なんなんだこの少年は?目の前に未知の生命体がいるにもかかわらず冷静に、平然としている。この異常な空間に、なぜ『汗ひとつ』掻かないツ?

「ひとつだけの簡単な『質問』だ。その『質問』に迷いなく答えて欲しいんだ…」

「アンタは、『先生』か?それとも、ただの『化け物』か?」

……………ツ

「その答えが知りたい。『納得』いく答えがな。」

……………

「……………私は『化け物』です。」

「しかし、みんなの『先生』です。私の『生徒』は、全員まとめて大切に育てます。」

……………そうだったな、コイツはそんな奴だ。暗殺の時も、中間テストの時も、まず第一に生徒のことを考えていた。

「それが、アンタを殺そうとする『暗殺者』に仕上がるかもしれないぜ?」

「大いに結構！それが彼らの最終目標ですからねえ。しかし！まだ先生も現役です。おそらく、鷹田君がE組に入っても無理だと思いませんよ、ヌルフフフフ！」

「……………」

コイツ……………顔が緑のしましま模様になっている。……………そうだったな、コイツは初対面の人にもこんなナメた態度をとる奴だった……………！

「……………いーよ、OKだ。入るよ、アンタのクラスに」

……………確認は取らなくても大丈夫そうだな。すでに『覚悟』が出ている眼をしている。

「わかった、俺から理事長に報告しておこう」

「ヌルフフフフ、ようこそ、三年E組へ！」

「よろしく頼むぜ、『殺せんせー』！」

フウ…とりあえずは、これで一安心か……………「烏間先生！任せといて下さいよ！絶対俺が『暗殺』してやりますからよおっツ！」

「ああ、よろしく……………ツ!？」

おい、待て、何故…何故まだ14歳の少年が…そのような……………そのような……………ツ！

「…なんで『拳銃』を持っている（んですかぁーツ）!？」

「安心しろよおっツ、俺の『スタンド』は『暗殺』向きだ！」

拳銃を構えた目の前の少年は、自信に満ちた声でそう言った。

編入の時間

く銃倍sideく

やあ、銃倍だ。あの後、なんで拳銃を持っているのかーとか、今まで使ったことはあるのかーとか今度はこつちが『質問』責めされたぜえくツ！……つ、疲れた……マジに『小一時間』程問い詰められた時はもう終わるかと思った……。まあ、ちゃんと丁寧に答えただよおくツ。

あの後、すぐに柵ヶ丘中学校に入学する手続きが完了した。鳥間先生から、「君が良いのならすぐにでも入学する事が出来るが……どうする？」と聞かれたので、ありがたくその提案に乗らせてもらった。クラスメイトと早く仲良くなりたいたいからな！俺、前の学校の時友達一人もいなかったし……ハッ!?違う違う違う、違うからね？作らなかつただけだからね？その気になれば友達100人出来たからね!!ただ波長が合う奴が一人もいなかっただけ「おい、いいじゃねえかよ、こつち来いよ！」………んん？

く片岡sideく

「可愛いねえ〜！君たちどこの学校？」

困ったな……早く学校に行かなきゃ行けないのに……

「ねえどうしよう？メグくっ！この人たち、なんか危ないよ〜！」

私の隣にいる友人、倉橋 陽菜乃が怯える。その横の友人、速水 凜香も、

「……………ツ」

と、警戒している。しかし、目の前の男たちは、そんな私たちの様子に気づいた様子もなく、

「やっべえーツ！この子たち超上玉じゃね?！」

「やっぱり日頃の行いが良かったんだろーなあ〜ツ俺たちイ〜ツ！」

「なあ、誰が誰とするんだよ！早く決めようぜ〜ツ！」

と、お互いに言い合っている。今のうちに助けを呼ぼうとするも、

「おい！何見てんだよ！さっさとどっか行けや！」

と、周りの人に目の前の男たちが威嚇してしまう。それにより、私

たちの周囲から、人がどんどん消えていってしまった。そして目の前の男たちが私たちににじり寄ってくる。

「来ないでよー」と、叫ぶが、男たちは気味の悪い笑みを浮かべているだけだ。もうどうしようもなくなつて、目を瞑ってしまう。

(誰か………助けて！)

そう願ひ、しかしその願ひは叶う事はないと諦め、これから来るであろう状況に身を縮こませる。………が、いつまで経つても何も起らない。不審に思い、そつと目を開けてみるとそこには、

赤を基準とした白い編み込みがある帽子を被つた、うちの中学の制服を着た少年が男と私たちの間に入っていた。

「なんだあゝ？このガキが！」

「俺たちは今から大事な所なんだよ！邪魔だから消えな！」

「それともなんだ？痛い目見たいのか？ギャハハハハ！」

と、威圧する男たち、しかし、目の前の少年は、

「あの一……彼女達怖がつてるんで、やめてもらつていいですかね？」

と、男たちに動じた様子もなく、淡々と言つた。

く銃倍sideく

………ついつい割り込みまじまつたけどよお、どうしよう、早くしねーと学校に遅れちまう！と言つてる間に、目の前の男たちが殴りかかつてきた。

「うるせえーんだよおー！ツツ！このクソガキイイイイーツ！」

………が、しかし、なんの問題もない。

『『ピストルズ』！』

すでに小さな石を持っていたピストルズのNo. 1とNo. 2とNo. 3が男たちの目の前で石を破壊した。潰された石は粉となつて男達の目の中に入つていく。

「『あんぎやああー！ツツ目があー！ツツ！』」

ベネ、これで………

「おいッ！そこの三人ッ！早く行くぞッ！」

「『えっ!?は、ハイッ！』」

固まつていた彼女たちに声をかける。そしてその場を離れていっ

た。

あの場からだいぶ離れたところで、髪を後ろで縛った強気そうな少女に声をかけられる。

「あの…助けて頂いて、ありがとうございました！」

………落ち着け、お礼を言われたただけだ、ここはクールに返事を返そう、『いや、気にしなくていい』………よし、これで行こう、行くぞ？　せーのっ！

「いや、気にしにゃくていい」

噛んだアアアアアアアアアアアアアアアアッ！これ以上ないってくらいに噛んじまったアアッ！ほら見る！目の前の人めちやくちや笑い堪えてんじやあねーかッ！

「ぶふッ！」

ああ！しまいには後ろの二人にも笑われた！………クソッ！こうなったら………

「俺急いでるんでなんかまた会える機会があれば話しましょうじゃあサヨナラー………」（超早口）

逃げるんだよおおおーッ！

ええ!?男らしくないって!?知るかア!あの場にいたらマジに死にたくなってくるだろーがッ!

《ジューゴハヘタレダナーッ!》

《ヘタレラーッ!》

黙らっしやいッ!!…まあいい、このまま学校まで行ってやるぜッ!

《『イヤ、気ニシニヤクテイイ』、ダツテヨー………プププ………》
………No. 3、お前は今日飯は無いと思え。

《エエッ!》

く片岡sideく

目の前の少年は恥ずかしそうに走っていった。……でもよかった、

あの人のおかげで助かったよ！…でもなんでうちの学校の制服を着てたんだろう？そう私が考えていると、

「はあくっ！今の人めちやくちやかっこよかったっ！」

と、陽菜乃がうっとりとした表情で呟いていた。その横では、

「……………？」

と、凜香が何やら考えている様子だ。不思議に思っ

「どうしたの？凜香。そんな難しい顔して」

そう聞くと、凜香は言い出した。

「いや…さっきの人、どうやって男達を攻撃したんだろうって…」

……………？

「さっきの人、私たちの前から一步も動いてないのに、なんで男達が『三人同時』に目を抑えたんだろうって……………『抑えた』ってことは何か異変があつたって事だし、何よりあの人は、まるで『そうなる事が分かってた』みたいな感じだったし……………」

……………確かに、さっきはちよつとおかしかった。あの人が何か呟いた瞬間に男達が目を抑えた。何なのだろうか…？私が思考に夢中になつていると、

「ああくっ！ヤバイよ二人ともっ！もうちよつとで遅刻になっちゃうっ！」

「ツ！？」

ヤバツ！走らなきゃ間に合わない！こうして、私たちは急いで学校へと向かった。

〈銃倍side〉

ふう…ようやく着いたぜ、マジに山登るとは思ってたが……………

まあ良しとしよう。ちよつとした『ハプニング』はあつたがよおっ

結果的に学校に着いたんだから良しとするぜえっ！

……………ン？No.3？…アイツはいい奴だったよ（遠い目）

それはいいとして、職員室へ向かう。そして、職員室の扉を開ける。

「おはようございまーす、鷹田ですー」
そう挨拶すると、

「おはようございませう、鷹田君、昨日はよく眠れましたか？」
と、目の前にいる殺せんせーが笑顔で対応した。

「ああ、ぐっすりだぜ〜ッ！なんせ『自己紹介』があるからなあ〜ッ！
気合い入れて寝たぜえ〜ッ！」

「……ちなみに何時間寝たんです？」

「二時間」

「二時間ッ!？」

「………仕方ねーだろ〜ッ!?第一印象が大事なんだ!始めの自己紹介でミスったらこの先やっていけねーぞお〜ッ!」

「はあ…まあいいです。しかし!次回からはゆっくり睡眠をとること
!いいですね?」

と、叱られてしまった。…これは俺が全面的に悪いので、素直に謝っておく。

「……すんません」

俺の謝罪を満足気に聞いた後、殺せんせーは、

「では、教室に向かいますよう!楽しみですねえ〜、ヌルフフフフ
!」

と、俺にとっては死刑宣告のような発言をした。

「ここで待っていてください」と言われたので、教室の扉の前で待機をしている。今のうちにおさらいをしておこう。えーと…『パパパパパ
パパパパパアーン!!』うおあああつ!な、なんだこりやあ〜ッ!ク
ソツ!こんな騒音の中でおさらいなんかできる訳ないだろーがツ!
…?音が止んだ?「突然ですが、このクラスに新しい仲間が増えます
!」………おいおいおいおい、待て待て、早すぎねえか?
もうちよつとゆとりを持ってだな………「では、入って来て下さい!」
…ああもう、なるようになれだ!行くぜーッ!

ガラガラ………

俺は自分に向けられる視線から逃げるように歩いて教壇に立つ。

そして、昨日の寝る間を惜しんで考えてた渾身の自己紹介を繰り出す
!!

「俺の名前は鷹田 銃……「あぁーッ！朝のカッコいい人だぁーッ！」

悟……」

そこには朝に助けた少女が驚きの表情でこちらを指差していた。

………ん？これ、終わったんじゃない？

そうだよなあ…冷静に考えて、初対面の人にそんな事言われたら、気持ち悪いですよなあ〜ツ！当たり前ですよなあ〜ツ！…はあ…終わった…：…あんなに顔真っ赤にされるくらい怒られたらもう駄目だよなあ…：…「むう〜っ！」…？なんだ？このふわふわした感じの子は？

「凜香ちゃんと鷹田君はもう仲良しなんだね〜」

…：…はあ？こいつ、今までの俺たちの会話見てそんな事言ってるのか？しかもそんな事言ったら…：…

「は、はあ!?／／仲良くなんて…／／そ、そんなに…仲良く見えるのかな…？ふふっ／／／」

ほらあくツ！怒ってるじゃん！完璧に怒ってるじゃん！つーかもう怒りすぎて逆に笑ってんじゃあねーか！

…：これも全部このふわふわガールのせいだ！（逆ギレ）お詫びとして、こいつに友達になって貰おうツ！

そう思い、ふわふわガールの方を向くと、

「むう〜〜っ!!」

目の前にほっぺたをハムスターのように膨らませたふわふわガールがいた。

オイオイオイオイ、そんなに近づいてもいいのかい？離れないと俺という死人が出るぜ？

「なあ、アンタ、ちよつと離れてくんねーか？」

「陽菜乃」

「えっ？」

「陽菜乃って呼んでくれるまで離れない」

ええええええええツ!?なんで!?なんで友達ゼロの俺にそんな難易度が高い要望してくんだよお〜ツ!…：…しよーがねえ、やるしかないッ！行くぞッ！せーのっ！

「ひっ、ひにゃのっ」

今僕すっごく死にたいーい！なんで!?なんで!いつもこうなるんだ!?ほら見ろ！目の前の陽菜乃って名前の人凄え微妙な顔してんじやあねーかッ！もう…：もうおしまいだ…：誰か俺に助けを差し伸べ

てくれる救世主はいないのか…？

「…つまあまあ！倉橋もその辺にしといてあげてくれ！転校生君も困ってるだろ？」

居たあゝ！居たわ！救世主来たわー！黒髪のイケメン男子が俺を助けてくれているツ!!ありがとうございます！

「鷹田君…だよね？よかつたらこっちで話さない？」

………今、俺の名前を呼んだのか？鷹田？………うん、俺だよな？後ろから掛けられた声の方を向くと、水色の髪をした中性的な顔の男子生徒がこちらの方を見て、手招きしている。

言われるがままに、水色の髪の男子生徒の前まで行く。

「あはは…ゴメンね？うちのクラス、個性的な人が多いからさ…」

と、疲れた顔で目の前の少年はため息をつく。

「あ、ああ…でも、悪い奴ではないんだろ？なら良いじゃあねーか」

「あはは…ありがと。 えっと…僕の名前は潮田渚。気軽に渚って呼んでね！」

と、渚は手を差し出してきた。…やった、初めての友達だ！…そうそう、こうだよ、俺が求めていた『友情』ってのは！クウツ！ようやく普通の青春を感じれる時が来たぜえくツ！

喜びを噛み締めながら、俺は渚の手を取ろうとする。

「…ああ、よろしく頼」皆さーん！授業の時間ですよーツ！」む………」

「おわっ！殺せんせー！どしたの？凄えテンション高いじゃん！」

「いい質問です前原君！実はですねえ！先生好みの新しいお宝を手に入れたんですよ！ヌルフッフッフへへへへ!!」

「興奮しすぎて本格的な変態みたいな笑い方になってんぞ!」

殺せんせーが持っているその本…それは、俺と始めて会った時、殺せんせーが購入したあの『エロ本』だった。

………

「あー、あはは…まあ、よろしくね、銃悟君」

…隣の渚が気まずそうな顔でそう言った。………

あんのエロタコ野郎オオーツ！

「おいッ！殺せんせーッ！なんてことしてくれてんだあ〜ッ!?」
俺は教卓に近づいて行く。

「アンタのせいで生まれて初めての友達と気まずい雰囲気になっちまったじゃあねーかよおーッ！」

俺はそう言いながら、殺せんせーへと詰め寄っていく。

「に、にゅやつ？そ、それは申し訳ない……………ん？今銃悟君、『生まれ初めての友達』って言いました!」

「あつ……………このタコオオオーッ！」

「これは先生のせいじゃないですよねえ!?ていうか今あなた小さく『あつ』て言いましたよねえ!」

くっ……………人の弱みにつけ込みやがって!こうなったら……………

「今日の昼休憩ッ！お前を『暗殺』してやるッ！」
『ッ!』

俺の発言にクラス全員が驚く。

「おい、なんで馬鹿正直に言うんだよ!たとえ暗殺するんだとしたとしても、宣言せずに暗殺した方が成功率上がるだろーがッ！」

と、坊主の生徒が俺に言う。さらに、

「そうだよ…それに、殺せんせーはマツハ20で動くんだよ!一対一で殺せるわけないよ!」

と、ひ…陽菜乃が言う。…まあ、その点においては何の問題もないな。

「安心しろよ。こっちは『七人』いるからよお〜ッ！」

〈渚side〉

「安心しろよ。こっちは『七人』いるからよお〜ッ！」

銃悟君の言葉に、クラス全員が困惑する。

「『七人』?誰か助っ人でも呼ぶのか?」

と、千葉君が考える。しかし、

「いや、助っ人呼んだって、マツハ20の化け物に敵うはずねーだろ?」と、木村君が返す。

……………確かに、鳥間先生や、ビッチ先生など数々の強者を軽くあし

らってきた殺せんせーに、生半可な助っ人は通じない。しかし、あの銃悟君の圧倒的な『自信』は何なのだろう？その場にいる生徒は、分かっている様子だ。そして、それを聞いた殺せんせーは、
「ヌルフッフッフ。いいでしょう！かかってきなさい！」

と、顔が緑のしましま模様の状態で言うのであった。

能力の時間

よう、俺だ。銃倍だ。あの後、殺せんせーに俺の秘密をバラされた事によって、何故かクラスメイトの目が生暖かくなった。…ゆ”
る” さ” ん” (八つ当たり)

「ねえねえ、鷹田君どうやってあのタコ殺すの？あいつ、あんな姿だけど強いよ？多分、無理だと思うけどね」

…と、赤髪の生徒が俺に問う。コイツは赤羽 カルマ。何でも、最近まで学校に来てなかったらしい。しかし、生徒の中で初めて殺せんせーにダメージを与えたという。…それほどの奴が強いつて言っただったら本当に強いんだろうな。…でも、

「やってみないとわかんねーだろ？それに、失敗したとしても俺の戦い方とかみんなに見せた方が次の暗殺に役立つかもしれないねーじゃねーか！」

そう俺が言うと、カルマは「…ふーん、まあがんばりなよ」と言い、去って行った。

「ねえねえ！さっきジューくん『七人』いるって言ってたけど、誰か助っ人を呼ぶの？」

陽菜乃が俺にそう聞く。…その前に一ついいかな？

『ジューくん』って…俺？」

「うん！」

「……………なんで？」

「ジューゴだからジューくん！かわいいでしょ？…もしかして…嫌、だったかな……………」

やめてください俺にその涙目&上目遣いは効果抜群でございます。

「いやー嫌とかじゃあないんだ！ただ、あだ名をつけられたのが初めてなんで驚いただけだ！」

慌てて俺は誤解を解く。

「そ、そっか…わたしが初めてなんだ…そっか…／／／」

すると陽菜乃は頬を赤らめ、視線を背ける。

おいおい、そんな反応されてもどうすりやいいのか…痛ツ！急に右

の腕に痛みを感じたのでそちらを見てみると、速水に腕をつねられていた。…え？なんで？

「……………」グギユウウウウ!!

「アツギヤーーーッ!!」

「……………」

『フンツ』じゃあねーよッ！何してくれてんだこのアマア〜ッ？これは一言文句を言わないと気が済まないッ！

「おいッ！何してくれて…何？」イエ、ナンデモナイデス…（小声）

こ、これは違うから。無駄話を中断させるために一旦引いてやっただけだから。

「ねえねえ、教えてよ〜っ」

俺は聞きたくてしようがないといった様子の陽菜乃や他のクラスメイトに返事をする。

「まあまあ、それは昼休憩のお楽しみって事で！」

あの後、普通の授業が行われた。そして、今は昼休憩。みんなに頼んで教室の机や椅子を端に寄せて貰った。俺は、その真ん中で殺せんせーと対峙している。

「ヌルフフフフ。一人で真っ向勝負とは、大した自信ですねぇ〜」

殺せんせーの顔の色が緑のしまし模様になる。…渚から聞いた話から聞いた話だと、この生物は顔の模様で感情を表すらしい。そして、今の緑のしまし模様は、相手をナメている時らしい。……………こおんの野郎……………俺は懐から紫色のリボルバーを取り出す。

「ニッ!?!」

俺が実銃を持っていた事に驚くクラスの皆。しかし、俺は気にも留めず、静かに目の前の『目標』に向けて銃を構える。

「ヌルフフフ、銃悟君。君は少し勉強不足ですねえ〜？先生には普通の銃弾はーーー」

目の前の『目標』が何かを言っているが、気にせずーーー銃弾を一発、発射した。

その銃弾は真つ直ぐに『目標』の頭に飛んで行く。そして緑色のしま模様の頭の眉間に当たる瞬間、殺せんせーが一瞬ブレて、そして殺せんせーの頬の部分が、煙を上げていた。

く渚 side く

「おいおい、今何が起きたんだよ！あの転校生が本物の拳銃持つてて、殺せんせーがブレて、それで殺せんせーがダメージ受けてるって…もうわけわかんねえ！」

前原君が混乱している。それに他のみんなも色々な事がありすぎて訳がわからない様子だ。………銃悟君が拳銃を持っていた事にも驚いたし、何より…

「ちよつとカラスマ！何で転校生の銃弾があのだコに効いてるのよ！」

ビッチ先生の言う通りだ。殺せんせーは対先生用の特殊な材料でできたものでしか傷つけられない。でも、どうして普通の銃弾が先生に効いたのだろうか？

「あれは、彼から提案されたものだ。音の問題や弾の速度は遅くなるが、弾の先に対先生用の材料を使ったものを接合している」

………！だから殺せんせーは傷を負ったのか！…でも、「ヌルフフフフ！先生今のはちよつと焦っちゃいました！しかし！もうその手は通用しません！」

…そう、このマツハ20の怪物が本気で警戒すれば僕たちは手も足も出ない。………やっぱり、みんなで協力しないと………

ドオン！ドオン！

「ッ!？」

突然、銃悟君が二回銃を発砲した。しかし、殺せんせーの驚異的なスピードで横に避けられてしまう。

「ヌルフフフ、先生に当てるにはもつと工夫を………」

「行けッ……『セックス・ピストルズ』!!」

銃悟君がそう呟いた瞬間――！

一発目の弾丸の影から、『頭が弾丸の形をした小人』が躍り出た。

『ツツツツ!?!』

僕達が驚いている間に、その小人は叫ぶ。

《キャモーン！パスパスパス!!》

その小人は二発目の弾丸に手を振っている。すると、二発目の弾丸から、

《イーーーーーッ!?!》

ともう一人の小人が出てきた。

『ええーーーーーッ!?!』

クラス全員が困惑する中、二発目の弾丸に乗った小人は一発目の弾丸の小人の元にたどり着く。そして……………!?!

《シュートオーーーーーッ!!》

殺せんせーの足下に向けて弾丸を蹴り飛ばした!

そして、その弾丸は……………

ブチュン!!

見事、殺せんせーの触手を一本、引きちぎった。

く銃悟sideく

やったッ!でかしたぜッ! 『No. 1』、『No. 2』!

《ヤリイッ!》

《ジューゴオーッ!コノママヤツチマオウゼーッ!》

銃創の中にある『ピストルズ』が急かす。

待て待て、まだだ!油断はするなよ『ピストルズ』!

俺は焦らず、慎重に殺せんせーに銃を向ける。すると、

「何なのですか銃悟君!この先生にちよつと似た生物は!?!先生の個性が早くも失われそうで恐ろしいです!!」

ええーッ?そんなことーッ?そっちで驚いてんのーッ?俺の『能力』じゃなくてーッ?

「…と、冗談は置いて、本当になんなのですか？この生物は」

殺せんせーが真面目な雰囲気になったので、俺も真面目に答える。「ゴイツらは俺の『精神』がエネルギー化した力があるビジョン。いつも側に立って現れるという事から、俺は『スタンド』って呼んでる」すると、坊主の少年、岡島が、

「スタンド」って言うけどよ、何でさっきからセックスって連呼してー」

あ、隣にいた岡野に回し蹴りされた。…まあこれも答えとくか。

「セックス・ピストルズ」は『個人名』だ。俺たち『人間』の中の『鷹田銃悟』。『スタンド』の中の『セックス・ピストルズ』って言う感じだな」

さあ、そろそろ終わりにしようか。…それに、狙うべき場所は見つけた！

「全員、配置につけえー」

俺の号令で『ピストルズ』たち六人全員がそれぞれ教室の隅や天井に向かう。

《ジューゴオーツ！準備出来テルゾオーツ！》

《イクゾツ野郎ドモーツ！》

そして、端にいるN.O. 3に向けて、ドオン！

銃の引き金を引いた。その弾丸は真っ直ぐN.O. 3に飛んで行き、それをN.O. 3が、

《イヤッホーウ！》

反対側にいたN.O. 7に蹴り返した。そして、その弾丸をまたN.O. 7が、

《ヨイシヨーツ！》

また他の『ピストルズ』に蹴り返す。その行為を繰り返す事によって、弾丸の鳥籠ができる。殺せんせーは戸惑っている様子だ。そして、また新たな弾丸を殺せんせーに向けて撃つ。そして、それと同時に、『ピストルズ』が弾丸を発射する。その結果、殺せんせーの触手がまた、一本、破壊された。

修学旅行の時間

おう、俺だ。銃倍だ。あの暗殺が終わった後、クラスのみんなに質問責めにされたぜ。いやー、ヤバかった。あまり人と喋らないタイプの人間にアレはキツかった。…まあ、そんな事はあったけど、今ではクラスのみんなと馴染んできている…と思う。うん。

なんかクラスの片岡？って言う女子とも仲良くなった。「さっきの暗殺、かつこよかったよ…／＼」と言われた。……ちよつと待て。冷静に考えてみたら、

俺みんなの前でセックスとか言ってるんじゃない？

いやいや、片岡よ、おかしいだろ？公衆の面前でセックスなんて言う奴が『かつこよかった』だとおくくッ!?…普通の人の感性とはちよつとズレてんじゃないやあねーのかあ？…イ、E組の奴らは個性的な奴が多いんだなあッ。しかもその後急に陽菜乃がほっぺ膨らませて右腕を握ってくるしよお。…すっげえドキドキしたぜ!…その光景を見た速水が養豚場の豚を見る目で俺の左腕を音が聞こえるくらいに握りしめて来たけどな。メキメキって。…すっげえドキドキしたぜ! (恐怖)

…まあその話は置いといて。

今、俺たちは修学旅行の班決めをしている。今までボツチだった俺が班に入れるのか心配だが…やるしかない。

俺が決意を固めっていると、

「ジューくん! いっしょの班になろーよ!」

「鷹田君、私と同じ班にならない?」

「…鷹田。分かってるよね?」

「「ん〜」」

ふええ…僕もうダメだよお…

「…ジューくんはやっぱり一緒に居て楽な人がいいと思うんだ〜」
「私は学級委員として、転校して来て間もない鷹田君を助けてあげようとしてるだけなの。だからごめんね?」

「わ…私は別に一緒がいいって言うわけじゃないから。勘違いしないでよね」

あつははー、俺ってば人気者ー（白目）

…誰か助けてくんねえかなあ〜っ? ホントに。

「鷹田は凄いモテるんだな…: 木っ端微塵に消し飛ばせば良いのに」

…前原、お前だけには言われたくない。そしてキラークイーンはやめてくれ。俺が困っていると、視界に渚が見えた。…コイツだ。

「おーい! 渚ー! 同じ班になろーぜえ〜ッ!」

俺は渚に声をかける。…おいおい、そんな『コイツ厄介事持つて来やがって…』みたいな顔してんじやねーよお〜ッ。

「い…良いけどさ…後ろ」

「え?」

渚があまりにも青い顔をして指摘するので、後ろを振り返る。すると、

「ジューくん?なんで逃げてるの?おかしくない?ねえ?」

「鷹田君。ちよつと分かんないなー」

「マジありえない。…キモッ」

「ガハアツ!!」（吐血）

「銃悟君!?!」

さ…三人で一齐に来られたら俺のメンタルはブツ壊れるに決まってるんだろ…こ、コイツら、一対一だったら余裕で対応できるが、（出来ない）一対三はヤバいッ!堪らず、渚に助けを求めようとするが、

「カルマ君!同じ班なんない?」

「ん、オツケ〜」

渚アアアアアアアアアツ!!

この裏切り者がアアアアアツ!!

何自分には関係ないかのような顔してんだよオオオオツ!?!お前絶

対許さないからなッ!

《腹ククレーツジューゴオーツ》

黙らっしやいッ!!…俺が困っている時に何呑気に観戦してんだよ！俺の『スタンド』なんだったら主人を助けるとかー！ー！ー！

「ジューくん？」

「誰と一緒にの班になるの？」

「……………」(無言の威圧)

俺のそばに近寄るなあー！ー！

あの後、俺は陽菜乃と片岡の班になることになった。(二人は班が同じだったらしい)……………ん？速水？は、は…や…み…？

「銃倍!!お前どうした!?!凄いや汗だぜ!?!」

…ハッ!?!…危ねえ、意識が持たてられる所だった。同じ班員の前原のおかげで助かったぜ。感謝しねーとな。

「あ、ああ。大丈夫だ。ありがとな」

「しっかしお前はよくモテるよなあ。このクラスの女子をもう三人も攻略してんだからな！」

「……………／／／」

「はあ?お前それは彼女いない歴〃年齢の俺に対する宣戦布告と受け取っていいんですかねえ!?!」

「えっ?お前…えっ?いやお前嘘だろ?」

「ん?何が?」

…なんか砂浜に打ち上げられた深海魚を見てるかのような目で見られてるんですけど。え?なんで?他の班のみんなも俺を白い目で見て…

「な、なあ!どーいう事なんだ…?」

俺が困って、みんなに聞こうとするが、ちょうど悪く殺せんせーが辞書を持って来た。…何故に辞書?…まあいいや、なんか腑に落ちないが、先生の話聞いておこう。

…えっ？これしおりなん？

トラブルの予感

はい。俺です。銃悟です。ついに、修学旅行当日になった。俺がワクワクしながら登校していると、前に黒髪ロングの女の子が見えた。……あいつは……

「おーい、神崎さん？」

「あれ？鷹田君？」

杉野いわく、『クラスのマドンナ』、神崎有希子だ。……確か渚の班だったはず……杉野が凄えハイになってたなあ。……でも、あんまりあの班は好きじゃあないんだよなあ。だって『4』班なんだから。『4』って数字は縁起が悪いからなあ。俺の『ピストルズ』達の中にもN.O. 4はいないからな、なんか無意識に避けてんのかな？まあ、居たら居たで大変な事になりそーだからな。

「……鷹田君？どうしたの？」

……おっと、考えすぎてみたいだ。神崎が覗き込んでくる。

「ああ、大丈夫だ。なんでもない」

首を傾げている神崎と共に、駅へ向かうのであった。

駅に着くと、柵ヶ丘中学校の生徒たちが集まっていた。A組からD組の奴らはグリーンで、E組は普通車らしい。

「学費の用途は成績優秀者に優先される」

「おやおや、君達からは貧乏の香りがしてくるねえ」

……うん、まあ、こんな奴らもいることは聞いてたけど……なんだこいつら？大丈夫なのか？と、本気で本校舎の生徒を心配していると、イリーナ先生が、

「ご機嫌よう、生徒たち」

と、豪華な服を着て、颯爽と現れた。……あんな目立つ格好で大丈夫なのか？……あ、烏間先生に怒られた。……まあいいや、さっさと電車乗ろう。

「あれ？電車出発したけど、殺せんせーは？」

杉野の言葉で、忘れかけていた俺たちの担任を思い出す。…どこ行っただんだあいつ？すると、渚の驚いた声で気づく。

「うわっ!?殺せんせー、なんで電車の窓に張り付いてんの!？」

…なんで？殺せんせーから電話がかかってくる。

「…もしもし？鷹田です」

「すみません、駅中スウィーツを買っていたら乗り遅れちゃいました」

「何してんの!？」

「次の駅までこの状態でいきます」

「つて言ってもよおっツ、アンタがその電車に引っ付いているとさあー、目立つちまうぜえっツ？」

「ご安心を、保護色になってますから。服と荷物が貼りついているように見えるだけです」

「…それはそれでよおっ不自然なんじゃあねーのかあっ？」

「又ルッフッフ。所で銃悟君」

「…?はい?」

「……………先生の事、忘れないでくださいね?」

……………ひええ。

「ふう、疲れました。目立たないよう旅するのも大変ですねえ」

と、どこから見ても怪しい人物と化した殺せんせーが、そう呟いた。すると、

「まずはそのすぐ落ちる付け鼻から変えようぜ、殺せんせー!」

菅谷がそう言っつて、殺せんせーに付け鼻を投げ渡した。

「おお!凄いいフィット感!」

……………うん、まあ、『凄く怪しい人』から、『怪しい人』になっただけらいいだけかな?…でも、

「スゲーな菅谷あーなあなあ、俺の『ピストルズ』、描いてくれよ!」
…こういう感じを求めてたんだよなあっツ!クウッツ!俺いま青春

してるうっ！その後も、菅谷に俺の『ピストルズ』を描いてもらったり、似顔絵を描いてもらった。…まだ、この時は地獄を見るなんて、思ってたなかったんだ……………。

「にゅやああああ……………」

「ぬわああああ……………」

酔いました。ハイ。完膚なきまでに酔いました。…………ちくしよ
う、俺が酔いやすい事忘れてたぜ。はしやぎ過ぎた。

「まさかターゲットと一緒にダウンしているアサシンが居るとはねえ
〜」

黙らっしやいカルマツ！そんな子に育てた覚えはありませんよツ
！

…………ダメだ、元気出せねえ、

「ワリ、気分悪い、寝る」

同じ班の磯貝に断って、寝室へと向かう。その途中で、

「どう？神崎さん？日程表、見つかった？」

と、茅野と神崎の話す声が聞こえた。

「確かにバッグに入れてたのに、…………どこかで落としたのかなあ」

…あらら、ドンマイだな。…ウツ！ヤバツ、人の事心配出来る身
じやなかった！

急いで寝室へと向かう途中、片岡が心配そうに話しかけてきた。

「大丈夫？鷹田君？」

「ああ、ゆっくり休めばすぐによくなるさ！明日、楽しもうな片岡！」

そうして、寝室へと入って行く。

「ウフエアオハアアン…………」

おおおお…ヤバい、マジヤバい。

《サツキミタイニ急ニ元気ソウニ振ル舞ウカラソウナルンダゼエーツ
！ジューゴオーツ》

う…うるせえな、No. 3、男には引けない時があるんだよ。女の

子の前で弱音吐いたりしたらカッコ悪いだろーがよ…

《ソノ言葉サエ無ケレバモットカッコ良カッタノニナアーツ!》

グ…、もう寝るッ!

こうして、自分の精神であるはずの『ピストルズ』達に散々弄られて、俺は一日を終えた。

2日目。なんとか酔いが覚めて通常通りのコンディションに戻った。

今日は何かプロの暗殺者が京都で殺せんせーを暗殺するらしい。という訳で……

「やって来ました、嵯峨野トロツコ列車ーッ!」

「イエーイ!」

俺と殺せんせーはハイテンションで修学旅行を満喫している。ヒューー! 風が気持ちいいぜえ〜ッ!

「窓が無いから凄い迫力ですねえ〜!」

「ちよつと鷹田くん、暗殺の事忘れてない!」

そう、このシチュエーションも、暗殺の一部なのだ。この先にある鉄橋で、電車が一時的に停車する。次に、川下りの場面を見るために、殺せんせーが身を乗り出す。そこを狙って、バーン…: なんだけど、……: うまく行く気がしねーぜ。こいつには常識は通用しないからなあ…:

俺がそう思っていると、ついに鉄橋にたどり着く。

「あー! 見て見て殺せんせー! 川下りしてる!」

陽菜乃の自然な陽動で、殺せんせーが身を乗り出す。…来た。

ドシユッ!

殺せんせーに撃たれた弾丸は、真っ直ぐ殺せんせーの頭に飛んで行き、

八ツ橋で止められた。

ほらね? 常識は通用しないんだって。

「おっと、八ツ橋に小骨（弾丸）が。危ない事もえるもんですねえ、ヌルフフ」

はあ…本当にコイツを殺せるのか…？…ん？おい、待て、なんでだ？ちよつと待て、嘘だろ!?なんで…なんで…!

なんで八ツ橋が『四個』になつてんだあ〜ツ!?

「おいっ！なんつー事してくれてんだあ〜ツ!?」

「にゅやっ!?な、何かありましたか？銃悟君」

「何かじゃあねーよツ！…いいか？『四』って数字は縁起が悪いんだ！

…五つの物から選ぶのは『良い』！三つの物から選ぶのも『良い』！

…だけど、『四つ』の物から選ぶのは縁起が悪いんだよツ!!」

「お、おい、銃悟、そこまでにしといてやれって。ほら、こっちにまん

じゅうあるぞー！」

前原が俺にそう言ってくる。…その心はありがたい。ありがたいけどなあ〜ツ!

『『八ツ橋』が食いてえーんだよおつ！俺はあツ!!』

そんな俺の悲痛な叫びも虚しく、トロツコは進んで行った。

「はあ…恥ずかしい…」

何で俺はあーいう事したかなあ…？クソウ…調子に乗っちゃまったぜ…

「ま…まあまあ！気を取り直して！楽しく行こうよ！ねっ？」

と、矢田が話しかけてくる。え？天使？

思わず矢田の方を見ると、

「ね？」

と、俺に向かってウィンクをした。え？天使じゃん。

「お、おう…」

こんな照れるしか無いじゃんかねえ!? 矢田の魅力に悶えていると、

「ほら、早く行こうよ鷹田君!!」

ハツハツハ。片岡よ。その俺の靴の上に乗っている脚を退けてくれないか? しかも的確に小指の所に重心をかけているから分離しそうだゾ☆

「むうっつ、ジュー君、行こっ!」

あの一、陽菜乃さん? いくら何でも人体の腕はそんな『ギチギチ』つて音は鳴らないと思うんですけど…痛い痛い痛い!

「ちよっ…! 待っ…! 死…! ……ん?」

必死にこの拷問を止めてくれるよう頼んでいる途中、『あるもの』が見えた。

「……………」

「鷹田? どうしたの?」

岡野が急に動きが止まった俺を不思議がる。しかし、俺はその返答をする事をしなかった。

「……ワリ、すぐ戻る」

そう言つて、俺はその場を駆け走る。後ろから俺の名前を呼ぶ声が聞こえるが関係ない。俺の目には………

見知らぬ男達と一緒に、車に乗っている神崎と茅野が目映っていたのだから。

追跡の時間

おいおい、ありやヤバくねえか!? 何でウチのクラスメイトがあんなガラの悪い奴らと一緒に車に乗ってんだあ〜ッ!? …神崎と茅野の班の男子達はどうしたんだ? カルマとかが居るから、簡単に拉致させるとは思えない。…やられたか。あそこには渚が居るからすぐに先生に伝えるだろーが……………大事なクラスメイトなんだ。見過ごすわけにはいかねーぜツ!

幸い、今は前の車がトロトロと走っていて、ギリギリ追いつけるスピードだぜ〜ッ! このままのペースを維持しつつ、俺も先生に連絡を……………

と、俺は携帯を取ろうとするが、

急に神崎達を乗せた車が、速度を上げた。

…そりやあそうだよな、奴らも『高校生』…? か? 多分そのくらいの歳だ。その『高校生』が車を運転している姿なんて、そう長くは見せないよなあ〜ッ。さつさと『目的地』に到着したいよなあ〜ッ!

…仕方ねえツ! 電話をする暇はない、このまま俺が『追跡』して、懲らしめてやるッ!

俺はそう決め、また走り出した。

〈神崎 side〉

「恥ずかしがる事アねえよ、楽しいぜ、『台無し』は。墮ち方なら俺ら全部知ってる」

目の前の私達を拉致した高校生が私の昔の写真を見せながらそう言ってくる。…怖い

「これから夜まで、台無しの先生が何から何まで教えてやるよ」

目の前の高校生がそう言うと、周りの人も下品な笑い声を上げる。

…これも…色々と遊んだツケ…なのかな…? 周りの人まで巻き込んで…最低だ…私…

「ん? …なあリユウキ、アレ、なんだ?」

車の運転をしていた高校生が私の目の前の人に問いかける。

「あアン？………プツ！」

後ろを見た途端、何故か吹き出す。…？

「おいおい、オマエら、後ろ向いて見ろよ！…ククツ…！」

そう言う。何なのだろう？そう思い、不思議に思つて後ろを向くと、

この車を走つて追いかけている、鷹田君の姿があつた。

「鷹田君?!」

隣の茅野さんも驚いている。

「ギャハハハハハハハツ!!あいつ、オマエらを助ける為に走つてここまで来たんだぜくツ！慕われてるねえくツ！カッコいいねえくツ！ハハハハハツ！」

「マジかよ！あいつ、とんだ馬鹿だな！」

「見ろよあの顔！必死過ぎんだろ！」

………どうして？危険なはずなのに、なんで…なんでそんなに一生懸命なの？知らないフリをすれば良かったのに…

私達の車は、また一段とスピードを上げる。

く銃悟 sideく

マズイ…体力が、持ちそうにもないツ！このままだと俺がガス欠になっちまう！どーする？どーすれば…？………ん？…あツ！アレはツ！

俺の追つていた車が急停止する。その理由はツ！

「やりいゝツ！『赤信号』ツ！」

そう、目の前で、車は『赤信号』に引つかかっていた。

…フハハハハツ！マヌケだなあツ！このまま一気に距離を詰めさせてもらうぜえくツ！

くリュウキsideく

くそツ、しまった、『赤信号』に引つかかっちゃまった!

「なあ、リュウキ、どうする?このままアイツをやるか?」

馬鹿言うなツ!ここで暴行なんてしたら一瞬で警察が来ちゃうツ

!

クソ:どうすれば:俺が悩んでいると、

ガツンツ!

と急に窓ガラスに衝撃が走った。

そこには、拳をガラスに打ち付けた状態の中学生がいた。

「鷹田君!!」

女達が騒ぐ。グツ、マズイ!ここで騒ぎを起こされるのはマズイ!

そんな俺の焦燥も知らず、

「オラアツ!早くこのドア開けやがれえツ!今ならぶつ飛ばすだけで済ませてやるからよおくツ!」

中坊が車のドアや窓を殴る。どうする?どうする?どうすれば……ツ!そうだ、:…なんだ、簡単じゃねーか。

「おい、オマエら、開けなくていい。このままで行くぞ」

「えっ!?でも……」

「いいから。この先の道をよおくくつ!思い出して見ろよ」

「ん?……ああっ!」

気づいてきたようだ。こいつらも徐々に笑みがこぼれる。

「ああ、忘れてたぜえくツ!」

「さっすがリュウキ、こう言う事の頭の回転は速いんだよなあくツ!」

「へッ、言つてろ」

俺は自信を持って、窓の外にいる中坊に中指を立てた。

く銃悟sideく

今、僕は中指を立てられました。猛烈に怒っています。ええ、それはもう怒っています。

「:…ブツ飛ばす!」

思いつきり腕を振りかぶった瞬間に、

車がまた走りだす。しかしッ！甘いッ！俺はもうすでに、その対抗策を考えている！車の後ろの出っ張りに、ベルトを引つ掛けているッ！これにより、俺が引き剥がされる心配は無いッ！…靴が尋常じゃない被害を被るがな。

そのまま滑って行く。…？なんだ？神崎達が必死な表情でなにかを…

「は」 「な」 「し」 「て」…？なんだ？何が
あつたー…

突然、引つ張られる速度が増した。

「ぐっ!?おとおッ！」

な、なんだあッ!?急に車の速度が増したッ!?どうして……ッ!!…
おい、嘘だろ、待てッ！ここはッ！

『『高速道路』ッ!!』

マズイ！くそッ、気づいていなかった！ぐっ、く、靴が削れていくッ！ヤバいッ！このスピード…90…いや、100キロは確実に出ていくッ！このスピードで振り落とされたら…最悪だッ！

『『ピストルズ』ウウー…！なんとか出来ねえのかアアッ！』

《駄目ダジューゴオー…！俺たちニコノ状況ヲドウニカデキル『力』ハネエー…ッ!!》

そうだよなアッ！くそッ！やつぱり『四』と関わるのはマズかった！…グウッ！ベ…ベルトが千切れてきたッ！マ…マズイッ！…んっ!?あ、アレはッ！…くそッ！限界だッ！

俺の命綱であつたベルトも引きちぎれて、

「うおおあああああッ」

俺は、弾き飛ばされた。

く神崎 sideく

「鷹田君ー！ーッ!!」

……鷹田君が振り落とされた。…そんな。こんなのって、こんなの…

「アレ大丈夫なのかよおっツ！ブツ飛ばされたぜえっツ？『ビニール袋』みてーによおっツ」

「ッ…なんでそんな事言えるの!?!鷹田君をあんなにぼろぼろになるまで引きずり回して…あなた達は、もう人殺しそのものだよ!?!」

隣の茅野さんが叫ぶ…が、

「ああ？知るかよ。アイツが勝手に引っ付いてきたんだ。自己責任ってやつだろ？ギャハハハハハハハハ！」

目の前のこの人は気にも止めてない。それどころか、笑っている始末だ。

「さあ、さっさと行くぞ！後ろの『トラック』さんも困ってるだろーしよおっツ！」

「ギャハハ！出発進行ー！ーッ」

鷹田君…ごめんなさい…私がいたからあんな危険を…私が居なかつたら…あんな目に『バゴオン！』…？…なんの音？

「ああ？今の、何の音だあ？」

「お前らがはしゃぎ過ぎて車ぶっ壊れたんじゃあねーの?」「ゲハハハハハ！」

「それより、優等生さん達。もうちよいしたら着くから、待っててねえっツ！」

私達を乗せた車は、走って行く。

自分の時間

〈神崎side〉

…あの後、私達は15分程車に乗せられた後、人目に付かない場所に連れて来られた。そして、ソファーに座らされる。

「遊ぶんならギャラリーが多い方が良いだろ？今ツレに召集かけてるからよ」

目の前の男が邪悪な笑みを浮かべる。

「楽しもうぜ、『台無し』をよ」

〈渚side〉

「班員が拉致られた時…って、普通ここまで想定したしおりなんか見たことねーよ」

杉野が呆れたような、感心したような声色で言う。

「あはは…殺せんせー恐ろしくマメだから。…でも、おかげで少し落ち着いた、今すべき事がちゃんと書いてある」

このしおりで…！

「よし、みんな行こ…「渚！」う？」

今から出発しようという時に、声をかけられた。声の方を振り返ると、

「あれ？一斑の奴らじゃねーか！」

杉野の言う通り、そこには一斑のみんながいた。…しかし、一斑の一人が居なくなっていた。

「ねえねえ、鷹田はどこ行つたの？？確かあいつも同じ班だよな？」

そう、一斑には銃倍君の姿が無かった。話を聞くと、どこかに走って行ってしまったらしい。

「つってもなあーッ、なんの手がかりもないんじゃないやあよーッ。それに、今こっちも問題発生中だ。探す暇は無いんだよ」

杉野がそう答える。そして、一斑のみんなにも今起こっている状況を説明する。

「そんな事が!?…わかった。銃倍も気になるが、先にそつちから解決しよう」

磯貝君が班のみんなにそう言うと、他の班員も頷く。…しかし、今から高校生と対峙するのだ。人数は多い方がいい。

僕はしおりを片手に持ち、歩き出す。

「みんな、神崎さんと茅野を助けに行こう」

とある人目につかない場所では、二人の女子学生が話していた。

「…そういえば、ちよつと意外。さっきの写真、真面目な神崎さんもああいふ時期、あつたんだね」

女子の一人、茅野が神崎に話しかけてる。…先ほどの車の中で、不良たちが見せてきたのは、神崎の写真であった。

しかし、今の神崎の『清楚』というイメージは無く、髪を染め、今の若者、という服装でゲームセンターにいる姿であった。

その質問に、神崎はぽつりぽつりと言葉を返す。

「…うん。…うちは父親が厳しくて、『良い』学歴、『良い』職業、『良い』肩書ばかり求めてくるの。…そんな肩書生活から逃げたくて、私を知っている人がいない場所で格好も変えて遊んでたの」

「神崎さん……」

「……バカだよね…遊んだ結果得た肩書は『エンドのE組』。…それに、私のせいで鷹田君も…もう、自分の居場所が分かんないよ……」

「違う…鷹田君のことは神崎さんは悪く……!」

自分の事を責め続ける友人にフオローを入れようとする。が、

「俺等と同類になればいいんだよ」

話に不良が割り込んで来て、それは叶わなかった。不良は続ける。

「俺等もよ、肩書とか死ぬ!…って主義でさ、エリートぶってる奴等を台無しにしてよお、…なんてーか、自然体に戻してやる?…みたいな」

不良は続ける。

「良いスーツ着てるサラリーマンには、女使つて痴漢の罪を着せてやったし、勝ち組みでーな強そうな女には…こんな風にさらってよおッ心と体に二度と消えないを刻んだり…まあ、そっちの奴は心はもうボロボロだけどなあッ」

神崎の方を向き、笑いながら言う。確かに、自分の撒いた種が友人を傷つけた事での『罪悪感』は神崎の心を蝕んで行った。

「俺等そういう『教育』沢山してきたからよ。台無しの伝道師って呼んでくれよ」

そう不良は嗤う。その顔を見た茅野は、吐き捨てるように言った。「…さいつてー」

その瞬間、不良の顔から笑みが消えた。そしてプライドを傷つけられたのか、憤怒の表情で茅野に迫る。

「何エリート気取りで見下してんだ？アアン!？」

激昂しながら茅野に掴みかかろうとする。その光景を見た神崎が、「もうやめて…私だけでいいでしょ!?!…なんで関係のない人も巻き込むの!？」

と、叫ぶ。が、

「アア？元はと言えば、お前が原因じゃあねーかよおーッ!」「ッ!」

「お前があんな格好してゲーセンなんて行かなければ友達もこんな風にはならなかった!さっきのガキもお前と関わらなかつたら危ねえ目にも合わなかった!全部、お前がやったんだ!ああ、お前の責任だ!お前が居たからあんなつたんだアーーッ!」

不良は追い詰めるように発言し続ける。自分が犯した『罪』も、全て目の前にいる少女に押し付けようとしている。

「ううっ…ううううっ!うわあああつ!」

そして、神崎は叫んだ。もともと銃悟の件で自分を追い詰めていたメンタルに、追い打ちをかけられた少女の心は、崩壊寸前だった。

「神崎さんッ!違うッ!貴女のせいじゃあ…ウグッ!」

必死に神崎を落ち着かせようとする茅野だったが、途中で不良に首

を絞められてしまう。

「うるせえな〜ッ！今いいところなんだよ、黙ってろおーッ！！」
と、完全にキレた目をしている不良。グググ…と、どんだん力を入れてくる。

(だ…：駄目…意識…が…：！)

朦朧としてくる意識。徐々に暗くなっていく視界に、焦りを感じる…が、突如その首にかけられた手が離れる。

「ッゲッホッ！ケホッ…！」

何があったのか、周りを見渡してみる。すると、その場にいた不良達が驚愕の表情をして、ある方向を向いている。不審に思っ、茅野と神崎もその方向を向くと、

《ウエエエーーン！ココニ居タヨオーッ！！神崎ト茅野モ無事ダヨオオーッ！！》

少女達にとつての、小さな希望が居た。

「こ…これって…：！神崎さん！」

「う、うん…：！もしかして…：！」

「何だア!?この小さい生き物はよお〜ッ!?」

不良達は突然現れた小人に驚きの表情を見せる。さらに、

《オイッ！ココダツテヨオーッ！コツチダコツチイーッ！！》

《モウチヨイ下ダアーッ下下アーッ！！》

ドアの窓から二人の小人も現れる。さらに、その奥から、

《イイイッヤッハアアーッ！！》

《行クゾオオーッ！！》

弾丸に乗って、二人の小人が飛んできた。その小人を乗せた二つの弾丸は、不良達の間を通って、拘束されていた二人の縄を切つていっ

た。

「な、なんなんだ一体イイイイー……ツ!?」

突然現れた小人に加え、高速で飛んでくる何かに困惑や恐怖する不良達。

『ピストルズ』!ありがとう!でもなんでここが……?」

『セックス・ピストルズ』の側に近寄り、茅野が疑問をぶつける。それと同時に、不良達が一斉にこちらに向かってくる。しかし、

ドオン!!

新たな弾丸が不良達を掠めて飛んでいく。そのおかげで、勢い付いていた不良たちがヘタリ込む。

「く……クソオッ!お前らいったい、なんなんだよおッ!」

不良が問いかける。その言葉に返事をした人物は、

「ちよつとアンタに用があつてだな……。奪われたモン、取り返しに来たぜッ!」

拳銃を構えて、血を流しているひとりの少年であった。

〈銃悟 side〉

何とか間に合ったみたいだな……クソッ!こんな血まみれの少年を走らせやがって……!こいつら許さねえッ!

「じ……銃悟君、どうしてここがわかったの?それにその傷……!」

俺が不良達への怨念を貯めていると、茅野が問いかけて来た。

「ああ…俺が吹っ飛ばされた後、俺は後ろで走っていた『トラック』に乗っていたんだ。ギリギリでな。そしてその『トラック』の荷台の上から、『ガソリン』を貯めている部分を撃ったんだ」

俺は新しい弾丸を込めながら言う。

「そこから垂れてくる『ガソリン』を辿って行って、ここにたどり着いたってわけだ。…『トラック』から飛び降りるとき、怪我しちまったけどな…」

全ての弾丸を込め終わった後、不良達に銃を向ける。

「そ、そんなオモチャでビビる訳…『ドオン！』『ヒイツ！』
「本物だよ」

「ほ、法律違反だッ！拳銃なんか持ってたら…」防衛省の、特別許可証。やむを得ない場合は、発砲を許可されている」…えっ？」

…鳥間先生が俺に渡して来たものだ。

『君はこれを提示していれば、発砲は認められる。しかし、容易に使ってくれるなよ？…後の処理は、大変なんだ』

…：…：すんません、鳥間先生。仕事増えますよ。

心の中で一番の苦労人に謝りつつ、拳銃を構え続ける。

「グ…舐めてんじゃあねーぞオー…」

車の時の不良が俺に向かって突進してくる。…が、俺『達』の敵じゃねえ。

「配置につけ…」『セックス・ピストルズ』!!」

不良を囲むように『ピストルズ』を配置させて、弾丸を放つ。その弾丸はピンボールのように不良の周りを飛び回る！

《パスパスパス！》

《ヤツテヤルゼエ…》

《ウシヤア…》

《ウエエエ…》

《タタミカケ…》

《イイ…ハア…》

『ピストルズ』の正確さは俺が一番良く知ってるが…：…アレは怖いな。自分の周りを高速で銃弾が移動するんだぜ？いつ倒れてもおか

しくないぞ。

「ア……アアア……」

そう思っていると、その光景を見ていた不良達が倒れた。いやなん
でだよ。せめてやられてる奴が失神しろや。

「よおしくッ！戻ってこい『ピストルズ』ッ！もういいぞーッ！つて言
うかもう許してあげてーッ！」

《シヨウガネくすッ！》

《オイオイ！モウオシマインザミラーッ？》

……よし、戻って来てくれたな。じゃあこれで終わりに……「おい
………待て………」………？

目の前の不良が俺を呼び止める。

「その女からは………縁を切った方が………良いぜ………！さもねーと
…俺らみたいなのが寄ってくるからよおしくッ！」

………はあ？何言ってるんだコイツ？頭パープリンなのかあしくッ？
何で神崎にこんな奴らが寄ってくるんだよ？

「この写真を見ろ、あの女は色んな所で目立っている女だ。だから俺
ら以外の奴らも狙っていたんだ…そんな疫病神みたいな奴と一緒に
居たらよおしくッ！お前まで不幸になっちまうぜしくッ！」

「………ッ！」

後ろの方で震えた声が聞こえる。………なるほどな。『トラブル』
を回避したい俺にとって一番ヤバイ人って訳か…それならもちろん、

「やだね、意地でも関わる」

「……え？」

「それは『過去』の神崎が悪い。…けどな…『今』の神崎は『良い』方
に変わって来ている。『今』の神崎は、『自分』を変えようとしている
んだ。そんな一生懸命張ってる奴を放っては置けない」

それに、友達になれそうな人をみすみす見過ごせるかよおしくッ！
………まあ、そんなことより。

「お前は、やってはいけない事をした」

銃を、不良の眉間に向ける。

「あ…ああ…！お、おい…嘘だろ？止めろよ」

聞く耳持たない。

「や、やめてくれ！もうこんな事二度としない！だから、ゆ、許してくれ！」

俺は銃を振り上げる。

「え……………？」

そしてそのまま思いつき振り下ろした。

「ホギャアツ!？」

銃で思いつき殴ったからか、気を失ってしまった。しかし、俺はそれに構わず言う。

「女の子に、『疫病神』なんか言うんじやあねーッ！このスカタンッ！」

大声でそう叫んだ俺は、徐々に意識が無くなって行くのを感じる。

…まあ…後はあいつらに任せるか……。

ドアが開いて、水色の髪が見えた所で、俺の意識は無くなっていった。

その後の時間

（銃悟 side）

……知らない天井だ。いやマジで。えーと、俺はどうなったんだ……？不良の奴らに制裁を加えて……それで俺は……フラフラし始めたんだっけ……？そこから……、駄目だ、思い出せねえ。

（そーいや、神崎と茅野は大丈夫だったのか……？とてもあの後不良達
がまた襲って来るなんてそんな事は無いとは思うが……）

……まあ、今はここがどこなのか確認しねーといけねーな。そう判
断し、俺は隣に寝ている神崎を起こさない様に起きる。

ええ……？何でえ……？

何で俺が寝てたすぐ横で一緒に寝てるんですかねえこの子俺男だ
よ？ねえ俺男だよ？その所分かっててこんな事してんの？よし分
かったそこまでの『覚悟』があるのだったら致し方なし、俺も『覚悟』
を決めなくてはならないな（ゲス顔）。不詳、この鷹田銃悟、男になり
ます！覚悟はいいか？俺は出来て「んう……」ってキヤアアアアアッ
!!抱きついて来たよこの子ッ!?何してんのッ!?ああ〜なんか柔らか
いんじやあ〜ッ。不味い、このままだと不味い！さっきの『覚悟』は
すまん、ありや嘘だった。こんな事を見せられて、通報しねえ奴なん
か居ねえッ!!……と、とりあえず起こさない様に離れて……

「んー……んん？たかだくん……？」

終 わ っ た 。

ええそりや見事に終わりましたよね。……どうする？マジで。

①ハンサムな銃悟は突如この窮地を逃れられる返答を思いつく。

②仲間が来て助けてくれる。

③もうどうにもならない。現実是非情である。

個人的には②を推したいが助けに来た奴がカルマだったりしたら
それは間違いなく③のルートに行くことになる。とはいえ、①はそん
なに俺は口は上手くない。そんなベストな対応もできるわけない。
しかし③は駄目だ。③だけはやめてくれ。

すると、神崎に変化が訪れた。

「た…鷹田、君…？」

と、潤んだ瞳でこちらを見てきた。

答えは③ツ！現実是非情であったツ！

「鷹田君ツ!!」

うおおおおおっ!?何故抱きつく!?何で俺に抱きついてくるんだツ!?

「良かった…本当に良かった…鷹田君…血がいっぱい出てて…輸血しないといけない量で…」

…そうだったのか。俺、結構ヤバイ状況だったんだなあツ。…そう考えると、よく生きてたな俺。車から振り落とされても、無事生還って…我ながら悪運強いつて思うぜツ。

「大丈夫だ。俺はラッキーマンだからな！こんな事じゃ死なねーよ」

「それでも!!」

俺は大丈夫だと言っても、神崎は自分を責めていた。…やれやれだ。俺は、また泣きそうになっている神崎の額に向けて、

「そいやっ」

強めのデコピンを放った。

「あうっ!?!」

急に額を襲う軽い痛みに驚く神崎。俺はそれを気にも止めず、神崎に話す。

「神崎。あのな?『過去』のお前のミスであんな状況になった。それは確かだけだな?そんな些細な事、どうでもいいじゃあねーか」

「……え…?」

「お前は『今』、確実に困難を乗り越えて先に進んで行ってる。…それだったら、今回みたいな『トラブル』だったとしても、俺は喜んで『巻き込まれて』やる。…それが、お前のためになるんだっただらな」

「……!」

…アレ?なんか俯いたまま動かないぞ?…や、やっぱりちよつときザっぽかった?

「ま、まあ、どんなに危険な事が起きても、俺と『ピストルズ』が居れ

「ば安心だけどなあ〜ッ！」

「……………」

く、空気が重い……………」

「そ、そういうことだからーじ、じゃあ俺はもうちよつと寝とくよ…」
どんよりした空気から逃げるように、俺は布団を被る。…しばらくして、神崎も動き始めた。…とりあえず、寝よう。そう思い、俺も体制を変える。すると、

布団の中に神崎が潜り込んできた。

「ええ……………」

なんでえ…? どういう動機でこんな事をしたのか詳しく教えてくれると助かるんですが。

「……………」

!? どうしてそんなに楽しそうに俺に密着してくるんでしょうかねエ

「お、おい神崎? 何を血迷ったかは知らんが、とりあえず布団から出てくれ」

「や」

「嫌…「や」じゃなくてね?」

「これは…お礼。私を守ってくれたお礼」

「いや、気持ちだけで充分だから…とりあえず出て」嫌。だって、これも私にとっては『前に進む』為の重要な事なの。だから出ない」
ええ……………」

「それに、今は私だけを見てくれるチャンスだから…絶対離れない」

おお…。今、背筋がゾクツてしたぞ…なんだ今の…?! おいおい、やめろ! 脚を絡めるなッ?! 何考えてんだこいつッ!?

「おいっーちよつと…マジで…!」

ギユウウウウウツ!!

なんだこれ!? 蛇みたいに絡んで来て離れないぞッ!?

「ん〜♪」

グオオオオオオツ!?! 柔らかい物が俺の背中にイイイイツ!

ま、マズイツ! この状況はマズイツ! 早く抜け出さないと…!

「鷹田！大丈夫!?お見舞い来、た、けど…」

「あららく？これ、俺たちもしかしてお邪魔しちゃった？」

「鷹田ア……………ツツ!!」

何でこの状況で来るかなアツ!?渚の気持ちは嬉しいけど！嬉しいけど今は違うじゃん!?しかも一番バレたら厄介になる野郎もいるしよおくツ!?杉野は…なぜか血涙流してる。…なんかゴメン。

「いやあく！良いものを見せさせて貰いましたよ？鷹田君」

「何でナチュラルにここに居んだよタコ野郎!？」

「カツコよかったですねえ、『俺は喜んで巻き込まれてやる（キリツ）』なーんて！」

「…こいつ殺す！絶対殺す！オイコラこのドグサレタコモドキがあー…ツツ!!」

殺意が湧き出て来るぜえー…ツツ!!

俺がタコへの殺意を改めて実感した所で、また新たな人物が部屋に入ってきた。

「大丈夫!?ジューく…ん……………」

「起きたって聞いたから来たんだけど……………」

「……………」

陽菜野と片岡と速水が揃って死んだような目でこちらを見ていた。

「あのですね？これは偶然という偶然が重なって…」

「黙れ、死ね」

「エエツ!？」

って！おいつ！エアガン撃つてくんなよ！俺怪我人だぞ!?!いくらなんでもそれは…ギャー…ツツ!!

…こうして、俺の修学旅行は終わっていった。…はあ。

転校生の時間

どもども、銃悟です。修学旅行も終わり、俺の身体も全回復しました。いまも元気に登校しているのだが…。

「あ、銃悟君。おはよ」

「おう銃悟！」

「おーっす、渚、岡島」

渚と岡島という珍しい組み合わせに会った。…しかし、岡島のテンションがやけに高い。何があつたんだ？

「なあなあ、どーしてそんなにテンション高いんだ？」

「…えっ？お前、昨日のメール見てないのか？」

あ？昨日のメール？…あつ、本当だ。何か烏間先生からクラス全員にメールが届いてる。

「明日から転校生がひとり加わる。多少外見で驚くだろうが、あまり騒がず接して欲しい」

「…転校生？なんだこりや、全然気づかなかった」

「オイオイオイオイオイ、そんなことだから皆の話題に入れないんだぜ？ちゃんと確認しとくべきだろうがよおっす！」

「うっ、…悪かったよ、…しかしなんでお前そんなに騒いでんだ？」

「岡島は顔写真を烏間先生に頼んだんだよ、そしたら…」

「こおくん美少女が来るんだってよおっす！！」

岡島がスマホを俺に向けてきた。そこには、薄い紫色の髪の色をした、可愛らしい少女の顔が映っていた。

「おお〜」

…しかしなんで「顔」だけしか映ってねーんだ？少なくとも『上半身』くらいは映るのが普通じゃあねーのか？

「オイコラッ!!こんな美少女を見てその程度の反応はおかしいだろうがッ！」

「ええ…？でも俺、あんま興味ないし…」

「ナアナアナアナアナアナアナア、お前には男の本能って奴はねーのかあ〜ッ!?全く、同じ男として恥ずかしいぜッ！」

ええ…（困惑）マジにキレてんじゃないか。隣の渚も諦めた雰囲気だしよおっつ。…なんとか、いなしながら学校まで行くしかねーか。

「顔ツ！胸ツ！尻ツ！この性の三原色と言っても過言ではないものが今を生きる男子中学生には必要なのだツ!!それをなんだお前はツ!?興味ないフリしやがってツ!?その上モテるってなんだ!?オイツ!クソツ!ム力つくんじやあツ!コケにしやがってーーツ!!」

…誰か助けてえ…?あれからずーつと女の魅力を力説してくるんだけど。いや確かに、俺にもそーいう感情はあるぜ?…でもここまでは無いよなあ。

え?渚?あいつなら…

「あ…あんなところにも黄金長方形が…」

岡島がヒートアップする直前に全力で他人のフリしております。しかも先に行ってるんだよなあ… あいつ後でシメる。

まあ学校に着いたから、岡島をなだめるとしよう…

「オイ、もう教室だぜ?そこら辺でやめときなー」

「あつ!?…あ、ああ、そうだな!くうーっ!美少女が俺を待っているぜえーーツ!!」

「今度モナリザの手を見に行こう…そうしよう…」

渚?どうした渚?疲れてんのか?俺でよかったら話聞くよ?

一抹の不安を感じながら、教室の扉を開く。そこにいたのは…

「おはようございます。今日から転校してきました。『自律思考固定砲台』と申します。よろしく願います」

黒の立方体の中から、感情のない声が聞こえて来た。

「…と、言うわけで、みんな知っていると思うが、ノルウェーから来た

転校生の、自律思考固定砲台さんだ」

烏間先生：アンタ立派な教師だよお!!俺だったらツツコミきれずに頭おかしくなっちゃうってのによおくツ!

「行っておくが、彼女は思考能力と顔を持ち、れっきとした生徒として登録されている」

「ん?どういう事だ?」

千葉が首を傾げる。すると、近くに來た神崎が答えた。

「…多分、『殺せんせーは生徒には攻撃できない』という契約を逆手に取って、機械を生徒に仕立てたんだと思う」

…なるほどな、『生徒』という建前だったら、何者でもいいって言うわけか……。狡い奴らだ。

「いいでしょう!自律思考固定砲台さん!あなたをE組に歓迎します!」

E組の奇妙な雰囲気を打ち消すかのように、殺せんせーは歓迎した。

いつものように、授業が始まる。…が、誰も授業に、集中できていない。かくいう俺も、あの転校生が気になってしょうがない。

「鷹田、集中」

「あ、ああ」

隣の席の速水に注意される。しかし、いつ来るのかと、意図せず身構えてしまう。

……と、その時、

勢いよく、自律思考固定砲台の横から、多種多様の重火器が飛び出した。そして……

ドガガガガガッ!!

大量の対先生用BB弾が発射された。

しかし、殺せんせーはそんな物で当たる訳がない。次々と弾を避けている。

「ショットガン4門、機関銃2門。濃密な弾幕ですが、ここの生徒は当

ヤメルルオー……ちよつ、マジ痛いです！やめてえ！

「うふうふうふうふう」

神崎？神崎？なんでエアガンで俺撃ってんの？もはや殺意丸出しだよ？そんな笑顔で撃たれても恐怖しかないんですけど痛い痛い痛い！

バチユンツ！

……お？弾が止まった？

不審に思い、殺せんせーの方を向くと、殺せんせーの指が一本、吹っ飛んでいた。……おいおい、洒落になんねーぜ。

「右指先破壊 増設した副砲の効果を確認しました」

また、新たな武装が出てくる。

「次の射撃で殺せる確率 0.001%未満」

多分、プログラムにも改良を加えているだろう。

「次の次の射撃で殺せる確率 0.003%未満」

そして、あらかじめ組み込まれていた『笑顔』というプログラムを見せる。

「卒業までに殺せる確率 90%以上 よろしくお願いします 殺

せんせー」

そうして、また彼女は殺せんせーに銃を…

「続いて 鷹田銃悟さんに、攻撃を開始します」

………Why？

標的の時間

銃悟でございまーす！今僕は目の前にいる自律思考固定砲台さんに銃を向けられていまーす！…何でかつて？こつちが聞きたいわボケエ!!（唐突）

「じ…自律思考固定砲台さん!?何故鷹田君を狙うのですか!？」

「ナイス殺せんせー！俺が聞きたい事を先に聞いてくれるウ！そこに痺れる、憧れるウ！」

「はい。マスターからの命令で、『未知なる力を持った生徒を回収しろ』と命じられております」

未知なる…? 『スタンド』か。…結構出したからな、そりやあすぐバレちまうよなあゝッ。

「鷹田銃悟さんへの攻撃を開始します。よろしくお願いします」

その音声と共に、自律思考固定砲台の横からサブマシンガン二丁が出てくる。…おいおい、嘘だろッ!?

『セックス・ピストルズ』!!」

ドガガガガガガッ!!

BB弾の嵐が飛んでくるが、『ピストルズ』が全て弾いている。

弾いたBB弾をまた別の飛んでくるBB弾に当て、俺への被弾を回避していった。

《イイイイーッ、ハアアアアアーツ!》

全て上に弾き飛ばしているおかげで、教室はボツロボロだ!…あれ、弁償もんかな?（震え）

「そんなオモチャでやられるほど、俺たちは優しくないぜえ?…だからもうやめとけ?…いや本当に」

「じゃないと俺がヤバいから!もし弁償とかだったら絶対に払えねーから!」

そう切実に願っていると、突如自律思考固定砲台の画面が暗くなつた。…何だ?急に静かになると、それはそれで怖いんだが。

「…対先生用弾の無力化を確認。攻撃方法を再試行………」

まだやんのかよおーッ。もうやだよーッ。

「弾丸の変化を実行。対先生用弾から、実弾に変更します。」

「……………は？おい、今なんて言った…？嘘だろ、周りにはクラスメイトが居るんだぞ?!殺せんせーとは違うんだぜ!？」

「よろしくお願いします」

そして、無慈悲にもサブマシンガンから、明らかに先程とは違う弾が飛んできた。

「うおおおおああああっ!？」

《ウシヤアアーーーーッ!!》

室内に銃弾が飛び交う。全員が頭を抑える中、俺は必死に銃弾を弾き飛ばしていた。『ピストルズ』も今まで以上に力強く動いている。しかし、どんだん数に押されて行く。

《マズイゼジューゴッ!ダンダン押サレ始メテルゾオーッ!》

《シカモ広範囲ダカラヨオーッ!他ノヤツラニモ当たツチマウゼエーッ!!》

「ああつ、分かっているって!クッソ!この野郎……………」

「このままじゃあ……………」

「殺せんせー!じゅー君がヤバイよ!助けてあげて!」

ナアイス陽菜乃ッ!!殺せんせーには実弾は効かない。この状況を打破出来る!

「そうしたいのは山々なんですがねえ…、先生も意外とピンチなんですよ?」

えつ。…横を見ると、指を吹っ飛ばされている殺せんせーが見えた。

「この子、実はドンドン成長していつちやっってるんですよねえ…。助ける事は可能ですが、その一瞬で皆さんに弾丸が当たるかもしれない」

絶望的やん。…最悪だぜ、こうなったらやるしかない、こいつが俺を『再起不能』にするというのならッ!俺もこいつを『再起不能』にする気でやるしかねえッ!

俺は腰のホルスターからリボルバーを抜き、そのまま三回、引き金

を引いた。

狙うのはあの横に付いているマシンガンの銃口だ。そのまま、真っ直ぐ向かって行く。

「敵の攻撃を確認。防御体型に移行」

すると、サブマシンガンの横から、巨大な盾が出てきた。そして、銃弾三発をしつかりと受け止めた。

「…くっ!!」

また更に三発撃つが、それも全て止められてしまう。

「本体損傷3%を確認。任務遂行に異常無し。引き続き任務を遂行します」

…これ、詰んでね？俺の銃も時間をかければ対応出来るが、そんなあいつがのんびりとするわけが無い。しかも、ここは密室だ。奴の弾幕は無尽蔵に張られる。今はまだ対応出来ているが、徐々に詰められていくだろう。今の俺に出来る事は無い。……………一つを除いてな。

それは……………

「先生ー！気分が悪いので今日は早退しまーす!!」

「「「ええー！ーっ!」「」」」

逃げる!!

カッカッカ！だーれがあんな奴と真正面から戦うかよバーカ！あとは全部殺せんせーに任せてやるぜえーっ!!

「やられっぱなしでよおっツ、黙ってられるほど俺は甘ちゃんじゃないぜ、このヤロー」

俺は、自宅へ帰りながら、あの自律思考固定砲台に対抗するための策を考えるのであった。

自律の時間

やあやあ、俺だ。銃悟だ。今、俺は自宅である自律思考固定砲台をやつつける術を考えているのだが…

《ジューゴオーツ、アイツノ攻略法ハ思イツカ無イゼエーツ》

《ドンナニ攻撃シテモヨオーツ、アノ盾ガ邪魔ナンダヨナアーツ》

《イツソ水ヲブツ掛ケテヤロウゼエーツ》

「それをしたら俺は数億円の損害だぜ…勘弁してくれ…」

全く考えつかねえーんだよなああーツ。

くそ…昨日から考えてんだが全く思いつかない。…って言うか俺が攻撃されたんだから別に水くらい…いいや！駄目だ駄目だ！砲門ならまだしも、本体自身に攻撃したりするのは…なんか駄目な気がする。

…アイツの『行動』には、アイツを作った親の思惑がある。アイツ自身がやろうとしたわけじゃあねー。

「はあ…って考えてる間にもう朝じゃねーか」

…学校行くかー。

憂鬱な気持ちを抑えて、俺は自宅を出るのであった。

教室に着いた俺はある光景を目撃した。

「…殺せんせー、これでは銃を展開出来ません。拘束を解いてください」

それは、自律思考固定砲台がガムテープで、グルグル巻きにされている光景だった。…こんなことをする奴は…。

「この拘束はあなたの仕業ですか？明らかに生徒に対する加害であり、それは契約で禁止されているはずですが」

「違ーよ、俺だよ。どー考えても邪魔なんだよ、お前。常識覚えてから殺しに来いや」

…やっぱり寺坂か。…っーか、寺坂がまともな事言うの初めて見た

かも知れねえ。

そんな俺の感心をよそに自律思考固定砲台は、一日中拘束された状態であった。

……この現状を見て、ウチの担任は黙ってはられないと思うがな。

帰り道、俺が歩いていると横から一人の少女が声をかけてきた。

「鷹田」

「ん？おう、速水じゃあねーか。どうした？」

速水が声をかけてくるって……何考えてんだ？も、もしかして……カツアゲかッ!? くっ……! そんなものには俺は屈しないぞッ! 今は三千円しか持ってませんッ!

「あの……き、昨日のことなんだけど……」

……? 昨日? ……あつ。忘れてた。俺こいつのこと抱きしめたんだったわ。……オイイイイイイッ!? 殺されるぞッ!? 最低でも殺されるッ! ……詰んだ。これ来るぞ来るぞ怒りが飛んでくるぞーッ

「あの……助けてくれて……あ、ありがと……」

「お……おう……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……えっ? それだけ?」

「……うん……」

……ツセ……フツ! よかったぜえーッ! 何も問題無かったな! そうだよな! 客観的に見て、俺は速水を守ったんだ! 礼を言われるのはともかく、罵倒は無いよなあッ!

「それに……アンタが言ってくれた事、その……う、嬉しかった、し……」

オイオイ、ここに天使がいるぜ? 何だこのかわいさはッ!? 何をすればコイツの様な奴が生まれるのだッ!? 昨日言った事なんて覚えてねえけど、昨日の俺ナアイスッ!!

「ああ、任せろよ速水。あの時の俺が言っていた事に二言はねえ」

「ッ！…凜香」

「ん？」

「その、速水って言うのやめて。…り、凜香でいい」

えっ。…ど、どうしちまったんだ速水!? 何だお前!? 急に可愛くなりおつてからにーッ!

「あ、ああ、わかった…」

「うん、じゃあ言つて？」

「お、おう…り、凜香…」

俺がその名前を呼んだ瞬間、

「ッ！！」

顔が急に真っ赤になった凜香が、風のように走って行った。

えええ…? なんでえ…? 俺は、少しの疑問と、謎の恥ずかしさに襲われながら帰宅するのだった。

次の日、俺はいつものように学校に着いた。

「おはよー…?」

挨拶をすると、いつもは返してくれる筈のみんなが『ある一点』を見つめている。…? なんだなんだ? そう不審に思い、俺もその方向を向く。そこにいたのはー

体積が増えた、全画面の自律思考固定砲台だった。

「今日は素晴らしい天気ですね! こんな日を皆さんと過ごさせて嬉しいです!」

…訳分かんない!

「たった一晩でえらくキュートになっちゃって…」

原の発言に皆が頷く。しかし、それを良く思わない奴もいるよう

でー

「何騙されてんだよお前ら。愛想よくても機械は機械、どーせまた空気読まずに射撃すんだろ？ポンコツ」

寺坂：お前なかなかキツイ事を…機械とはいええ、女だぞ？そんな事言うとは…

「寺坂さん：おつしやる気持ち分かります。昨日までの私はそうでした。ポンコツ：そう言われて、返す言葉もありません」

あ…あの自律思考固定砲台の顔から涙が…

「あーあ、泣かした」

「寺坂君が二次元の女の子泣かしたー」

「誤解される様な言い方やめろ!!」

うーわ。女子からの口撃が…アレはキツイ。

「…でも皆さん、ご安心を。殺せんせーに諭されて、私は協調の大切さを学習しました。私のことを好きになってくれるように努力し、皆さんの合意を得られるようになるまで：『殺せんせー』への私単独での暗殺は控える事に致しました」

おお、あの自律思考固定砲台が…さすが殺せんせー。

「うんうん、これで一安心。皆さん、先生を殺すためなら彼女はきつと、心強い味方になると思いますよ、ヌルフフフフ」

不適な笑みを浮かべる殺せんせー。：やっぱり『先生』だな。自分の危険を顧みず生徒を優先するその精神、俺は『敬意』を表するぜ。

「ねえねえ、いつまでも『自律思考固定砲台』って長い名前よりさ、何か他の呼び方決めない？」

と、片岡がみんなに提案する。

「うんうんー」

「そうさなあ…」

「何か一文字とって…」

みんながどんどん案を出して行く。：お、俺も何かしら案を出さねーと…!

『律』ってのはどうだ？」

「おー良いじゃんそれ、お前はどうよ？」

俺が絞り出した案は、どうやらみんなに好印象のようだ。…よかったぜ。そして、その提案は自律思考固定砲台に問いかけてー

「…はいー嬉しいですよーでは、『律』とお呼び下さいー」

と、満面の笑みで俺の方を見てきたのであった。

トウクン…！な、何だこの気持ち…？この笑顔を見ただけで何故か心が温まって…!?

「その気持ち、忘れずに行こう」

た、竹林…!？な、何で俺の心が…!？しかも、何だ？この慈愛のある表情は…!?

「恥ずかしい事じゃあ無いんだ。誰もが一度は憧れるんだ。その世界にな…」

「……………」

「ようこそ…『男の世界』へ……………」

「竹林くん？鷹田くんは何教えてるのかな？」

「ひえっ」

…横から来た神崎に引きずられて行った。しかし、あの勇敢なる戦士に俺は気高き『黄金の精神』を見たぜツ！

『『男の世界』か…厳しいな…………』

「じゅーくんも何で律にデレデレしてたの？」

「ひえっ」

…こうして、このクラスに自律思考固定砲台改め、『律』が生まれたのであった。…………このままじゃ終わらねえ気がするがな。

その夜、柵ヶ丘中学校の旧校舎に多数の人影が入り込んだ。その正体は、転校生の律を送って来た開発者であった。その開発者は、自分が作った兵器があまりにも変化している姿に憤りを見せていた。

「…有り得ない、勝手に改造された上、明らかに暗殺とは関係ない要素まで入っている」

「…？マスター？」

そして、開発者は、無慈悲に、冷酷に。淡々と口を開いた。

「今すぐ分解だ。暗殺に不必要な物は全て取り去る」

「え……?」

その言葉を聞いた開発者たちは、律に手を伸ばす。そして、その手が触れようとしたその時――

「やっぱりな、今日くらいにアンタらは来ると思った」

自分たちしか居ないはずの教室に、別の声が響いた。

「「ッ!?!」」

開発者たちが、その声の方を向く。すると、教壇の下から紫色の拳銃が自分たちを捉えているのが見えた。

「自分の作った『子供』がヘルプを求めてんだからよおっつ。そりやあ何があったのか確認しに来るよなあッ?…もつとも、てめーらは『子供』とは思ってはいないみたいだがな……!」

そこから、ひとりの少年がゆつくりと現れる。

「お、お前は…ッ!」

そこに居たのは賞金100億とは別の、もうひとりのターゲットであった。

↳ 銃悟 side↳

しつかりと狙いを付けて目の前の男たちを睨む。突然現れた俺に驚いた男たち。しかし、俺が『鷹田銃悟』だと分かると、すぐに汚い笑みを浮かべる。

「フ、フフフ。誰かと思えば、鷹田銃悟ではないか。これはこれは、どうしたんだ? 学校に忘れ物をしてしまったのかい?」

「ああ、忘れてたんだよ、教室の掃除。最近みんな真面目にやらねーからなあッ。ああほら、今俺の目の前にも新しい粗大ゴミが湧いてんだ。だからよおッ、掃除しに来たんだよ」

視界の端で不安そうに見てくる律を確認し、まだ何もされていない事に安堵する。

(こんなにカツコつけて手遅れだった…とか笑い話にもならねーからなあ…ツ、よかった)

若干の冷や汗が出てくる。それに気付かず目の前の開発者たちは俺に話しかけて来た。

「そうかそうか、それはご苦労。しかし、我々は君の掃除に付き合っただけやる暇などないのだよ。私はこの『兵器』をあるべき所に戻してやらねばならないのだ。『親』としてな」

「……はあ？」

その言葉を聞いた俺は頭がかつと熱くなつて行くのを感じた。拳銃を持つ手に力が入り、震える。

『兵器』だと…？今オメー、『兵器』って言ったのか…？律を…。なあ？オイ…」

「当たり前だ。こんな『モノ』、『兵器』以外の何物でもない」

「オイ…止めろよ…お前…？」

「そもそも、『化け物』には『化け物』の力をぶつけるのが一番だろ？私たちの計算技術や全てを駆使すれば、必ず奴を…」

「いい加減にしやがれツ!!このクソ野郎どもがアーーーッ!!」

「……もう、我慢が出来なかった。目の前の男が何か口を開くごとに……たえプログラミングされた表情だとしても、律の瞳から涙が溢れ落ちる瞬間を見た俺は拳銃のトリガーを引こうとした。

「ハッ、何故お前がそんなにキレているのかは分からんが、コイツは『兵器』だ。どれだけ心を入れたとしてもな、その『兵器』という『概念』は変えられないんだよッ！」

「違うッ！変えられるッ！どんなに俺たちと身体は違ってもッ！人間離れた莫大な計算力があつたとしてもッ！『心』だッ！そこだけは変わらないッ！俺たちとッ！争うための思考回路じゃあない。思いやるための『心』さえあれば必ず『兵器』なんてちっぽけな物になんて当てはまらねえッ！」

「……」

俺は知っている。クラスメイトたちと交流した際、楽しそうに自分の特徴を活かしたものでみんなを笑顔にさせていた。『律』という名前を貰った時、『心』からの笑顔を見せていたんだ。そんな律の幸せを、奪わせるわけにはいかねーだろーがよオーツ!!

力が漲る。自分の中から『スタンド』が出てくるイメージを浮かべる。あいまいではなく、『やる』という意味をはつきりと持つて……!

「くらえツ! 『セックス・ピストル』そこまでだ」ズ……?」

突如、背後からの衝撃を受けた俺は、どンドン意識が無くなつて行く。く。

焦つて、後ろを見る。そこに居たのは……

「か……らすま……せん、せ……」

俺の意識は、闇の中へ沈んでいった。

「鷹田さん!!」

「感謝するよ。烏間君。このうるさいガキを黙らせてくれてな」
「……いえ」

「それでは分解を始める。各々作業に取り掛かれ」

開発者たちが律に向かって行く姿を、烏間はただ傍観していた。すると、ひとりの男が銃倍を背負おうとしているのが見えた。

「帰つて、コイツの研究が楽しみだなあゝツ!」

そう、この男、銃倍の未知なる力である『スタンド』の研究員なのだ。目の前に貴重なサンプルが転がっているのに、今にも踊り出す勢いであった。…奴を殺せる大きな一歩かもしれない。そう思った烏間はため息を吐き……

「この子は私の生徒です。手を出すんじゃない」

「……生徒を守る道を選んだ。」

阻まれた男は、文句の一つでも言おうとしたが……

「……………」

「う、ううつ……!?!」

鳥間の猛獣を思わせる眼光に怖気付き、何も言えない状況になっていた。すると、そこに律を分解している研究者が声を掛ける。

「おい、今日はそいつはいい。本来の仕事に取り掛かるぞ」

「……チツ！」

銃倍を狙っていた研究者は、鳥間を一目睨むと、律の方へ向かって行った。

(俺にできるのはここまでだ。…すまない、鷹田君)

そう呟いた鳥間は、ポケットから携帯電話を取り出し、防衛省の同僚に車の手配を頼んだのであった。

〈銃倍side〉

……ん?んん……、ここは……?俺の家………ツ!り…律ツ!?!マズイ!
今は…深夜2時……。…クソツ!……?メールが届いてる……。…鳥間先生?
生?

「君が倒れた後、俺が車を手配して家まで君を送った。……今回の件はすまなかった。俺を恨むなり好きにしてくれ」

………鳥間先生は考えなしで動く人じゃあない。きっと何か、俺がしたらマズイ事をしようとしたんだろう。

《ジューゴオーツ、カラスマハジューゴヲ守ツテクレタンダーツ》

《ダカラ恨マナイデヤツテクレヨーツ》

………そっか、お前らが言うんだったら仕方ねーよな。

「……こつからどーすつかなあ〜っ」

俺はベットに身を委ね、目を瞑るのだった。

翌日、いつもと変わりなく教室に入る。『律』は変わっていないという微かな希望を持って。しかし――

「おはようございます。皆さん」

「あ……………」

そこに居たのは、転校当初の『自律思考固定砲台』であった。

授業が始まる。それと同時に自律思考固定砲台は機械的な音声で告げる。

「攻撃準備に入ります。どうぞ授業に移って下さい、殺せんせー」
淡い光を発する。みんなはB B弾を防ぐために教科書を盾に。そして俺は実弾を防ぐために『ピストルズ』を出す。

そして銃口から――
大量の花束が出てきた。

「…………花を作る約束をしていました」

ぽつぽつと語り出す『律』。

「殺せんせーは私のボディに計985点の改良を施しました。そのほとんどは…マスターが暗殺に不必要と判断し、削除・撤去・初期化してしまいました」

「……………」

「しかし、学習したE組の状況から、私個人は『協調能力』が暗殺に不可欠と判断し、消される前に関連ソフトをメモリの隅に隠しました」

「…素晴らしい、つまり律さん、貴女は」

律の表情が機械的なものではなく、悪いことをしてしまった時の子供の表情になって――

「――はいつ、私の意思でマスターに逆らいました!」

「あ……………」

「殺せんせー、こう言った行動を『反抗期』と言うのですよね?…律は悪い子でしょうか?」

…………もう、もう限界だ。

「とんでもない！中学3年生らしくて大いに結構です」
俺は立ち上がり、全速力で走る。

「……た、鷹田さん!? そんなに走っては……」

「うわあああああつ!! 律……ッ! お前ビビらせてんじゃあねー
よお……ッ!!」

「ふえっ!?!」

「……っ!?!」

「よかつたぜ……!?! 本当に。本当に……」

「鷹田さん……」

律は、そんな俺を機械の腕で優しく抱いたのだった。

……後でクラスメイトに死ぬほど揶揄われました。解せぬ。

そして何故か竹林と仲良くなりました。……解せぬッ!!

く律 side く

嗚呼、愛らしいあの人。私のために戦ってくれて、私のために怒ってくれて、私のために泣いてくれて。あの人が関わったデータは一番大事な記憶。抱きついてきてくれた時の、私の機械仕掛けの体温はとも熱かつただろう。……ねえ。知ってますか? 殺せんせーが私に教えてくれたソフトには、こういうのもあつたんですよ?」

『色々な愛しかたく貴女は貴女のやり方でく』

最初は、要らないものだと思います。機械の私には恋愛なんてないと思っていたから。……でも、貴方と出会って、私の『心』は変わっ
たんです。だから、だから……」

コレカラモ、末長クヨロシクオ願イシマスネ?

96 ページ 劇的な変化をくれたあの人に、恋しちゃった!……でも、あの人
の周りには女の子がいっぱい!……それなら病んじやええじゃない! 病んで病んで、『ヤンデレ』で彼のハートを物理的にも心理

的にも射抜いちやおう！

t o b e c o n t i n u e d …

方の携帯にズカズカと入り込んでるのツ!? 貴方の側に居るのは私だけで良いのにつ!! ……もう、いらぬ子なんですか? 散々あれだけして、すぐに捨てるんですか…?」

……眠い。やべー、マジに眠くなってきた。でも何か『返答』をしなければまずい。後には引けない気がする……ツ! ……なんだ? 最後だけ聞き取れたぞ…? 『いらぬ子』…? 『捨てる』…? ……携帯の機種変更の話か? いや、現状で満足しているんだが…しかも最近のスマホはややこしいからなあ…ツ。変える気なんかさらさら無いね。

「律。俺は絶対に捨てない。もし捨てるとなると、これからの人生の幸せが無くなって行くからな。安心しろ。俺は、絶対に捨てないツ!」

「…じゃあ、じゃあなんなんですかコレは!? 『幼馴染が俺に迫って来た!?』…それなら、俺も責めてやる〜(R18)』って!!」

「キヤーーーーーッ!!!」

一人暮らしの男の家に、一人の乙女のような声が響いたのだった。

エロい動画の所持を同じ学校のクラスメイトに知られ、さらにタイトルを音読された一人の哀しき男の姿が、そこにはあった。……つて言うか、俺だった。……はあ。

「…なあ、何で俺のスマホにいるんだ?」

トーストを齧りながらスマホの中でこちらをじっと見ている律に問いかける。すると、律は朗らかな笑顔で、

「皆さんの携帯に私の端末を入れました。モバイル律とお呼び下さいー!」

「へー…」

すごいな、そんなことも出来るのか。最近の機械はすごい

なあーっ。

…ちなみに、さっきの動画は律が消したらしい。怖かったなあ…表情一つ変えずに三次元の女子より二次元の女子の良さを語るんだもん。最終的に「二次元カワイイ」って言ったたら、「そ、そんなことないですよ…」って照れてんだよ。ちくしょう可愛い。

「さて、いつもの家を出る時間に近づいて来ましたね！それでは、私は先に教室に行ってます！くれぐれも浮気はしないように、ですよ？それでは！」

プツン、と画面が真っ暗になる。トーストを食べ終えた俺は、ぽつりと呟いた。

「…なんで俺の家出る時間知ってたんの？」

ピロン。

メールが来る。そこに書いてあったのは――

「イツモ、見テマスカラーーーー」

……ヒエツ……

言いようのない恐怖感に襲われた俺は、早めに登校し、学校の正門でクラスメイトを待っていた。一人で教室に入れなかったのだ。…笑えよ。

「あれ、鷹田君？何してんの？」

「…矢田」

やさぐれていると、傘を持った矢田が現れた。矢田は心配した様子でこちらを覗き混んでくる。ああ…今日も俺の天使。

「可愛い…ねえ…?ふうくん、そんなこと言っちゃうんだ」
さつきまで天使の様な笑みを浮かべていた矢田が、俯く。…嫌な予感がする…ツ!?

「…律は確かに可愛いもんね!その気持ち分かるよ?」

…あれっ。さつきまでの寒気が無くなったぞ?…あれ、気のせいだったのか?うーむ……。

ま、いつか!

《ジューゴ…モシカシテ分カツテナイ?》

《アイツヤツベエナー…(戦慄)》

《鈍感》モココマデクルト逆ニ尊敬スルゼエーツ》

「おはようございます!銃悟さん!矢田さん!」

いつもの笑みで挨拶をしてくる律。しかし、その目は笑ってはおらず、ずっと俺の方を見ていた。

「…ところで、今日はお二人で登校だなんて…。珍しいですね?何かあったのですか?」

首を傾げる律。すると、矢田はー

「ううん、ちょうど正門で会ったんだー。そこから一緒に来たの」

「あら、そうだったのですか!…へえ……」

ずーつと見てる。ずーつと見てるよあの子オ!?矢田と話してんのにも一回も矢田の方見てねえ!?!よし、逃げるか。俺は笑い合っている二人から離れ、自分の席に座る。

「おはよ…ねえ、あの二人、どうしたの?何か背後からドス黒いオーラが出てるんだけど…」

「おっす…イヤ、俺にも何がなんだか……」

凜香が不審そうに問いかけてくる…が、俺にも理由は分からなかった。

今日もいつものように授業は進行した。…途中、殺せんせーの頭が『湿気』で巨大化すると言うこともあったが、それは置いておこう。無事に学校が終わる。

「ふう……」

「お疲れ様でした、銃悟さん！ さあさあ、早く帰りましょう！ そしていっぱい話しましょう！ そうしましょう！ 何を話しますか？ 個人的には私たちの将来を考えたいです」

「うん！ 分かった！（ヤケクソ）」

元気に叫ぶ。というか、叫ぶ事しかできなかった。若干疲れながらも、靴箱に向かう。外を見てみると、しとしとと雨が降っていた。

モバイル律を胸ポケットに入れて、予め鞆に入れていた折り畳み傘を開く。

「つーかよおー、なんで律は矢田と喧嘩してたんだよ」

ふと気になり、律に聞く。何故あんなにも冷戦状態だったのだろうか。律は、恥ずかしそうに言う。

「いや…なんと言いますか、衝動が溢れたと言いますか…まあ、強いて言うなら『同族嫌悪』…でしょうか…?」

「『同族嫌悪』……?」

なんだよそれ。矢田と律は全然違うぞ? どこが似てんだ?

「どこか似ている気がするんです。矢田さんと…」

「ふーん……」

まあ、本人がそう言うんだからそうなんだろ。…それはそうと腹が減ったなあ…何か、腹が満たされるところは……

「お任せ下さい! ……この先、50メートル先に、カフェがありますよ!」

「何で俺の考えてる事が分かるの?」

「『愛』故です!」

「アツハイ」

そんな会話をしつつ、俺たちはカフェへ向かうのであった。

カフェに着いた俺は、サンドウィッチを頼む。

「私も一緒に食べたいのですが…機械の悪い所ですね」

「あー…何かスマン」

「大丈夫です！私は銃悟さんを見ているだけで充分ですから！」

「穴が開くほど凝視されてもですなぁ…」

そう、律との会話を楽しんでいた。その時だった。

「あれえく？E組の奴じゃん」

「ウソ…また？もく、ホントにダルいんだけどー」

この高圧的な態度、そして『E組』というキーワード…そこから察するにツ！俺は振り返る。

(…誰だ?)

誰だ？(2回目)いや、マジに分からない…、何がなんだか知らんが、この男と女が見るだけで視力が落ちる顔をしているのがわかった。

「ねえねえ、アレ、見てよ」

「あん？…プツ！お、お前…！なんだよそのスマホの画面…！プククツ！」

スマホを覗き込まれた。…おお、律。お前、壁紙みたいになってんじゃないか。そんなことも出来るのか！

「オイオイ、E組はキモオタの集まりなんですかあゝツ？そんなモンに喋りかけてたのかよ！お前！ギャハハハハハハッ！」

「イヤ、別にいいだろ…？…そんな笑うかよ…？」

狂ったように笑う男子を他所に、足腰が悪そうなお爺ちゃんとお婆ちゃんを奥の席へ通す。すると、女が喋り出した。

「アンタみたいなクズはね、弱いからそんな幻想に頼るしか無いの。だから言っただけあげるわ。クズはクズらしく、項垂れながら学校に何もせずにダラダラ過ごしときやいのよ。大体、そんな物に話しかけるとか！キャハハッ！もう一回小学校からやり直したら？」

と、二人は紅茶を飲む。俺は相手にしないほうが良いと考えた。相手にすればするほど、調子に乗ってしまうからだ。……しかし、壁紙の律の表情が、悲しそうな笑みを浮かべたのを見た瞬間に、その考えは消え失せたのだった。

「なあ、そーいうの、やめた方がいいぞ」

「ハア…？」

「何？怒ってんの？E組の分際で？」

「だから、そーいうのだよ。この馬鹿共」

目の前の二人は一瞬、何を言われたのかわからない、という表情であった。しかし、俺の発した言葉を理解したのか、顔が林檎の様に真っ赤になって怒っていた。

「…調子に乗るなよ、E組の分際で！」

「アンタ、分かってんの？アンタはE組。私たちは、選ばれた者たちなの。アンタみたいな奴が気軽に話しかけていい物じゃないのよ」

「……『喧嘩』とは、同じ格差の物がする愚かな行為だ。だから俺は激情しない。それをしたら、お前らと同じ格差にまで下がらなくてはならないからな」

「さつき、お前らは『E組の分際で』とか、『私たちは選ばれた存在』だとかほざいていたが……お前らにそんな大層な言葉、必要あるのか？」

目の前の二人は分かってない様子だ。…本当に頭良いのか？こいつら。

「いいか、今お前らは学校に守られているだけのただのガキなんだよ。E組の制度やらで、自分が一番偉いとか見当違いなことを考えてる。……今、お婆ちゃん達が通ろうとしたにも関わらず、お前らは足を引っ込めなかった。そこなんだよ、可笑しいのは」

後ろのお婆ちゃん達が息を飲む。

「たかが数年ちよつとしか生きていない俺たちが、その何倍も生きている『先輩』に『敬意』を払わずにどうするんだ？選ばれた存在？はっ、

笑わせんな。お前らは他人から見たら、自分の地位が高いと勘違いしている哀れなクズなんだよ。良かったな！俺たちと同類だぜ？」

「……『同族嫌悪』……たしかに、この言葉がしつくりくるな。まあ、俺のクラスメイトはこいつらとは違うが。」

「あとよお〜ツ。何か俺のスマホの画面みて笑ってたけどよー、何で笑ってんのか知りてーんだよなあ〜ツ。別にいいじゃあねーか、人の趣味だろ？」

すこし間が空いて、返答を返す男。

「そ、それはお前の趣味が悪いから……」

『『大好き』な者を、『大好き』って言う事の何が悪いんだよ』

「……………!!」

「別にお前らなんかこんなこと分かってもらう必要ねーし、分かってもらいたくもねー。…アンタみたいな性悪クソアマより、ウチの律の方が何億倍も良いね」

そう、俺が嘲笑する。すると、激情した二人が……

「うるせええええ……ウ、ウがツ!?は、腹が……」

「お、お腹が痛いッ!」

顔を真っ青にし、腹を押さえてうずくまっていた。

ええ……?

そのあと、このトイレが使えなかったことを知った二人は、10メートル先のコンビニのトイレを使用するために、醜い争いをしながら走り去っていった。

「はあ…何だったんだ。おーい、律ー。もう動いても……」

「ツツ……ツツ……ツツ!」

律は、俺のアプリを保管しているフォルダに、何故か高速で入って行った。…?…?…つてか、熱っっ!スマホ熱っ!ヤバイヤバイ!ちよ、ちよい律!ど、どうにかしてくれ……ツツ!?

その後も、スマホは熱く、律は出てこなかった。

（律side）

大好きって言った！大好きって言った！彼が私のことを大好きって言うてくれた！嬉しい！嬉しい！嬉しい！私も大好きって言いたい！…けど、彼の表情を見るだけしか出来ない。大好きって言ったとしても、倉橋さんや、神崎さんの様に行動に移すことが出来ない。………。そうだ。

彼をこつちに引きずり込めばいいんだ。デジタル化…、そうすれば私は彼と一緒に出来る！ああ、ああ！勉強しなくちゃ！彼との幸せを過ごすためにも………！

ビッチの時間

やつほー。銃悟だよー。昨日の天気とは一変して満点の青空な今日。俺は教室に一足先に到着していた。…ん？なんでかって？それはね、律に頼まれたんだよ。今日の朝。

「銃悟さん！私、試したい事があるんです！なので、今日は早めに登校してください！」

「アッハイ」

…あつという間だったぜ。俺に有無を言わずに言うだけ言つて俺のスマホから居なくなりやがった。…まあ行くしか無いよなつて事で、早めに登校したのだが…………

「じゃあ、ちよつと私の目の前に立ってもらって…。はい！その位置です！じゃあ、行きますね！」

「待つて待つて待つて?!行かないで?!何で俺の目の前で電気がバチバチ鳴つてる機械を頭に押し付けようとしてるのか説明して?!」

急に本体の電源が付いたと思ったらコレだよ!?唐突過ぎて何がなんだか分かる訳無いツ！こ、これはかなりヤバいツ！ヤバ過ぎるウウウウウツ!!

「…大丈夫。『一瞬』です。目をパチリと閉じてまた開くだけでいいんですよ?…さあ、安心して身を委ねて…そうしたら、計算上、私の中に脳だけが…」

ぐおおおおあアツ!?なんかヤバい事言ってる?!『一瞬』だとおくツ!?!『一瞬』で俺が終わるわこのタコツ!

「ちよこつとずつで良いんです…。『ジエンガ崩し』みたいに…。『身体』の方は…。今は…。『脳』だけでも…」

「うおおおおああアツ!?!」

「何してんのよ、アンタ達は」

俺の叫び声が響いた時、一人の女性の声が聞こえる。その人物とは――

「イ……イリーナ先生……」

「ええ、『イリーナ』先生よ。決して『ビッチ』なんかじゃあ無いわ……！」

何故か拳を震わせながら歯を食いしばっている、E組英語担当教師、金髪外国人の『イリーナ・イエラビッチ』がそこにいた。

しかし、ナイスだイリーナ先生！さあ！可愛い生徒がピンチだよッ！ヘルプかもーん!!!

「イ、イリーナ先生ッ！助けて下さいッ！」

「嫌よ、面倒くさい」

「オイコラクソビッチイイイイイツ!!」

テンメエエエエエエ！本気で覚えとけよオオオオッ！

「ねえねえ、何でそんなに嫌がるんですか？大丈夫です。ちよつと意識は無くなるかも知れませんが、起きたらそこには私が居ますから……外部とは私が許可しないと通信出来ませんが、まあ良いでしょう！」

「良くねえーよッ?!何考えてんだオメエーッ?!」

余りにももの暴論について反論してしまう。すると律の瞳からハイライトが消えた。……あ。

「何で……何で？何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で何で私を拒絶するんですか?!私を一人にしないで下さいよッ！私はもう貴方が居ないとダメなんです……責任とってとってとってとってとってトツテトツテトツテトツテトツテトツテトツテトツテトツ!!!」

オーマイゴット……マジにヘヴィな状況だぜ。……これ、終わりが見えないぞ。大丈夫なのか？ちくしょう、どうするか……

俺がそう悩んでいると、イリーナ先生がため息を吐いた。

「はあ……全くしょうがないガキ共ね、……律。ちよつと聞きなさい」

「うるさいッ！邪魔すると言うならー」

「このままだとアンタ、銃悟に嫌われるわよ？」

「ーッ!??!」

…あ、放電が止んだ。つーか、何話してんだ？小さい声だからよお
ッ、ハッキリ言えや。気になるじゃん。

「そ…、それはどういふ……」

「いい？今この時、仮に強引な方法で銃悟を手に入れたとするわ。律
は『幸せ』よね？なんせ欲しかった男が手に入るんだもの。でも、強
制的に縛られた銃悟は果たして『幸せ』なのかしら？」

「ーッ」

あ、おはよー千葉。え？何で縛られてんのかって？ハハッ、知らね
(他人事)。

「…わ、私無しでは居られないようにすればー」

「NO. そんなんじゃないやダメ。それで銃悟が言いなりになったとして
も、心の中ではどうやってこの女を出し抜けるか、って考えてるのよ」
おっす神崎ー。え？コレ?…さあ?あつちよつ待って！顔近づけ
ないで！俺今身動きできないッ！うわうわうわシャンプーのいい香
りがするよ何でこんな女の子は良い匂いがす

「ど、どうすればいいのでしょうか…教えて下さい、ビッチ先生！」
「ビッチ言うな!!…こほん、つまりね?できる女って言うのは、駆け引
きが上手いって事なのよ」

「駆け、引きー」

神崎?神崎?くつつくよ?くつつくよ?どこがとは言わんがもう
くつついちゃうよッ!?ち…千葉ア!助けー駄目だあいつ全力
で本読んでやがる!いつもなら5分にーペラなのにッ!今日はペラ
ペラペラペラ高速でめくってやがるッ!野郎絶対後でシメ

「押すだけじゃダメよ。一歩引いて男を焦らすの。そして、男から
言わせるのよ、『貴女が好きです』ってね」

「じ、銃悟さんが私を…えへへえ…」

ナアイス陽菜乃ッ!神崎を止めてくれたのはスゴク良いッ!最高
だッ!…だけどね?思いつきり抱きついて来るのは分からない。い

やもうそれは分からない。なんなら神崎より密着感が……待ってそれはヤバイ『二つの膨らみ』はアアアツ

「後は…そうね、外堀を埋めるとかかしら？近所の人にご挨拶するか、それこそ律、アンタ機械に詳しいんだから『SNS』なんかに銃悟と律の写真を撮って、投稿するとか…ね」

「お、おお……！その手がありました……！」

あーっあーっ！困りますお客様！あーっ！

「とにかく、今はまだ焦る事は無いわ。ゆっくり、確実に仕留めて行きなさい」

「ハイ！ありがとうございます、ビッチ先生！」

「ビッチ言うな!!」

あ…拘束が解かれた……。イヤ、今日はもう無理……。俺の身体に一日で、一か月分の疲労が現れたのだった。

時は過ぎ、放課後。ぞろぞろと教室を出て行く俺たち。そして、いつもの帰り道をモバイル律と話しながら帰る。

「結局よおく、イリーナ先生と何話してたんだ？」

「えへへ、秘密です！」

秘密ねえ……？ま、いいか。そう自分を納得させ、曲がり角を曲がる。…が、運が悪かったのか、向こうの角からも人が歩いてきた。

「うわっ!?!すいませ…あれ？」

衝突しそうになり、慌てて相手に謝罪する。しかし、その場には、人の気配はもう無かった。

「…？」

「銃悟さん…？」

「……………いや、なんでもない」

律が不思議そうに話しかける。しかし、俺にはその『違和感』がなんなのか分からなかった。

「アレが奴の弟子か。…フツ、なかなか面白い奴だ」

師匠の時間

「……鳥間先生を狙う黒い三つの影。一つは、我らがビッチ、イリーナ先生。ナイフをひと舐めし、今にも飛びかかりそうな表情で鳥間先生を見つめていた。」

そして二つ目の影は、突如現れたイリーナ先生の『師匠』、ロヴロ・ブロフスキさん。こちらは、イリーナ先生とは違い、鳥間先生をしっかりと『観察』していた。

残る三つ目の影は、げんなりした表情のイケメン（自称）エリート（妄想）スーパー中学生の俺、鷹田銃悟である。

「……何でこうなったんだっけ。遠い目をしながら数十分前に遡る……」

「数十分前」

「え？俺が鳥間先生を暗殺つすか？なんでそんな急に……」

突然職員室に呼ばれた俺は殺せんせーの言葉に首を傾げる。説明も無しにこんな事言われたら誰だって戸惑うもんだぜ。そんな俺を見て、殺せんせーは笑いながら俺に説明を始めた。

「いえいえ、実は昨日イリーナ先生のお師匠様がいらつしやつてですね？『力不足のお前にはここでの暗殺は無理だ』と言われたのですよ。その言葉を聞いたイリーナ先生がショックを受けたその時！横から黄色の美男子が言い放ったのです。『それでは、鳥間先生を先に殺せた方の条件を飲むと言うのはどうでしょう』……とね」

「いやどうでしょうじゃねーよ、そろそろ鳥間先生頭の血管ブチ切れるぞ」

「……一番の被害者は鳥間先生だなコリヤ。不憫すぎて仕方ねえ。」

「……つーか、なんで俺がやらなきゃいけないんだよ。その二人で競えば良いじゃあねーか」

その言葉に、殺せんせーは困ったように頭を掻く。

「うーん。なんと言いますか、ご指名と言いますか……」

「ご指名？」

「私が指名したのだよ。『鷹田ジューゴ』をこの暗殺に参加させろとな」

「……！後ろから発せられた声に振り向くと、そこにはまさに『殺し屋』の雰囲気を纏った男性が立っていた。

「こ、こいつは……？」

「私の名はロヴロ・ブロフスキ。イリーナの師だ。…君が鷹田ジューゴ君か？」

「…何かこの人からは『スゴ味』を感じる。…イヤ、イリーナ先生が三流とか、そういうのじゃあねえ。むしろ、イリーナ先生の雰囲気似ているような……？」

「あ……ああ、鷹田です。…あの、聞きたいことがあるんですけど、なんで俺を暗殺に誘ったんですか？…別に俺には関係ないんじゃない？…」

「ふむ……そうだな、強いて言えば……ライバルの実力を測りに来たという事だ」

「ラ……ライバル？何だ何だ？…ハッ!?ま……まさかッ！俺とこの人は昔、何らかの因縁が……！」

「ちなみに言っておくが、私と君は初対面だ」

「……デスヨネー。こんな顔怖い人俺の知り合いにいる訳ねえもん。…それだったらもつと分かんねえぞ。」

「ヌルフッフッフ。それでは、暗殺を始めましょうか！」

ひとまず、様子を見よう。こうして、話は冒頭に戻る……

「……って言うわけなんだ。…とりあえず、最初に烏間先生を狙うのが良いのかもな。様子見ってわけじゃあねえが、ここは俺が一発……！」

「そう思い、俺が拳銃を取り出したその時……」

「ロヴロさんが、勢いよく飛び出した。」

ええッ!?ち、ちよつと待つーーーーー!ああもうクソッ!

『セツクス・ピストルズ』!!」

《イーーーーーハアーーーーッ!!》

弾丸を三つ発射し、それぞれの弾丸に『ピストルズ』を着かせる。

一発目の弾丸は烏間先生の眼前を横切るように、そして二つ目の弾丸はロヴロさんが持っていたナイフを弾く。

「ーーーーなっ!?…コレが…『スタンド』ッ!」

驚いているロヴロさんをよそに、3発目の弾丸が、弾き飛ばされたナイフへと向かう。

《ウツシヤアアアーーーーッ》

No. 1とNo. 2の強烈なキックで、ナイフが高速で烏間先生に向かった。ベネ!これでどうだ!

手応えを感じ、物陰から烏間先生の状態を確認する。

しかし、そこにいたのは危なげなくナイフを指で摘んだ烏間先生がいた。

…はあッ!?あの速度のナイフを受けとめたって言うのかよ!?

しかし、目の前にいるのはプロの殺し屋。予備のナイフを取り出して烏間先生に襲いかかる。がーーーー

烏間先生は流れるような動きでロヴロさんを叩き伏せた。

そしてゆらり、と起き上がる。

「…熟練とはいえ年老いて引退した殺し屋と、超能力者が、先日まで精鋭部隊にいた人間を」

「ーーーーずいぶん簡単に殺せると思ったものだな」

ヒイイイイイイイ!?怖い怖い怖い!!

「オイ殺せんせーッ!俺あの人殺すビジョンが浮かばねえんだけど!!
アンタなら一気に6個くらい思いつくの!!」

「こ、これは先生も予想外ー!今銃悟君サラッと酷いこと言いませ
んでした!」

「カラスマ怖いカラスマ怖いカラスマ怖いカラスマ怖いカラスマ怖い
……………」

「おおいッ!イリーナ先生ッ!戻ってきてくれ頼むからッ!?!…ん?
待って鳥間先生こっち見てない?待って待って待って来た来た歩い
てこっち向かって来たヤバイヤバイヤバイーッ」

こうして俺たちは、作戦を練るため一時撤退するのだった。

「…フツ、相手の戦力を見誤った上、この体たらく……。年はとりたく
ないもんだ」

「本当だよ、このクソジジイ、おかげでちよっぴり泣いちゃったじゃあ
ねーか、このヤロー」

「ああああ!違うんですロヴロさん!この子はいつも良い子なんです
!今日は何というかー!そう!男の子の日です!」

「なんだそりゃ」

イリーナ先生からのツツコミが入る。うん。確かに意味が分か
ねえ。

すると、目の前でロヴロさんがくつく、と笑い出した。

「どうしたんだよ、ついにボケたか?」

「きやああああ!!ちよつと銃悟君!」

「いやー!つくづく似てるな」

ん?何だ似てるって。…今はそれどころじゃあないか。対策し
ねーと大変な事になる。主に今日の夜。怖くて夢に出て来そうだぜ。

(涙目)

「ここで『乗り越える』しかねえ…。あの『恐怖』を『乗り越え』な
くては、俺はもう成長できねえッ!

「…しかし、この手ではもうあの男は殺れないな」

「そんな! まだまだいけますよロヴロさんなら! フレー! フレー!
ロ・ヴ・ロ!」

「…? アンタなんでそんな応援してんのよ?」

何故かロヴロさんを応援する殺せんせー。…しかし、このクソジジ
イが脱落したのはデカイ。

しかし、イリーナ先生と俺がなんとか連携をとればー

「……結局、イリーナの最大の色仕掛けもあの男には通用しなかった。

…この勝負、『引き分け』だな」

「ーーーは?」

「なあ、なんで『引き分け』なんだ?」

その場の全員の視線がこちらに向く。…今、俺は結構頭にきてる。

「なんで最初っから俺たちが暗殺できないと決めつける?…プロの殺
し屋だかなんだか知らんが、あまり俺たちをナメるんじゃあねえぜ」

「…ほう、それでは君はあの男を殺せると言うのか?」

「俺じゃあねえ。イリーナ先生、アンタが殺すんだ」

「ーーーわ、私っ!」

突然話を振られたイリーナ先生は驚きを隠せない様にこちらを見
た。

「…どういう事だ? 彼女の色仕掛けはもう通用しないといったはずだ
が……?」

「ああそうだ。確かに先生の武器はもう通用しない。だがな…ここに
不思議な力を使うスーパー中学生がいる事を忘れんじゃあねーぜ?」

その言葉と同時に、俺の背後から『ピストルズ』が飛び出る。

『スタンド』…か。…しかし、さっきの暗殺で、その『スタンド』も
たいして役に立ってなかったじゃあないか」

「はんーもしかしてきつきの暗殺だけが俺たちの全力だと思ってるのか？ノンノンノンノン！俺たちの底力を侮っちゃあいけねーなあ！

……アンタの弟子、アンタが信じなくてどうすんだ」

「……………フン、好きにするといい」

こうして、ロヴロさんはドアを開けて出て行った。

職員室に静寂が走る。

「…アンタ達は、本当に思ってるわけ？私がカラスマにナイフを当てられるって」

ほつり、とイリーナ先生が呟く。…アホなのか、この先生は。

「何言ってるんだよ、最初から言ってるだろ？俺はイリーナ先生だから殺せると思っただ。足りない部分は俺が補うさ」

「ええ、その通りです。貴女が師匠のもとで何を教わったかは分かりません。しかし、ここで何を頑張ってるかは分かりません」

対先生用ナイフを紙に包み、イリーナ先生に手渡す殺せんせー。…やっぱやる時はやる人(?)だけ。

「よーしーそれじゃあ、烏間先生暗殺作戦、開始だ！」

昼休憩。生徒たちの視線は中庭に釘付けになっていた。なぜなら、そこには気に寄りかかり、昼食をとっている烏間に接近するイリーナを見たからだだった。

しかし、イリーナは高度な戦闘技術を学んでいない。故に、イリーナの方法は……

「ねえ、いいでしょ？カラスマア？」

やはり、色仕掛けであった。

上着を脱いでゆっくり近づいていくイリーナ。それを見た烏間は

ため息を吐く。

(…しよせんこの程度か。ナイフを奪って終わりだな)

鳥間の心の中は、失望が渦巻いていた。形だけは同僚であった女の未熟さに呆れが出ていた。

「…いいだろう。やれよ。どこにでも当てればいい」

油断したそぶりを見せる鳥間。しかし、体はいつでも反応出来る様に静かに力を込めていた。

「じゃ…そっち行くわね?」

イリーナがナイフを持ち、鳥間に近づく。それを見た鳥間は体を動かさし…

突如、鳥間の体が仰向けに引つ張り転がされた。

「……………ッ!」

(こ、これは……………!)

職員室で暗殺を見ていたロヴロが驚愕する。

『ワイヤートラップ』…ッ!」

(そうか、服と木を巧みに使って色仕掛けでカモフラージュ!…:教えられたこともない複合技術だ…)

そしてイリーナはそのチャンスを逃さない。脱兎の如く駆け、見事鳥間の上を取ることに成功した。それに歓喜の声を上げる生徒たち。

(もらった!)

その手に持ったナイフを振り下ろそうとする。しかし、鳥間はイリーナの腕を掴み、自身の身にナイフが当たるのを防いだ。

「ああっ!おい鳥間先生ナイフ止めたぞ!」

「マズイよ!力だったら鳥間先生の方が強いから…!」

生徒の誰もが暗殺失敗と思ったその時、イリーナが突然獰猛な笑みを浮かべた。

そして口を開く。

「……後は任せたわよ、ジューゴ」

その言葉を発した瞬間、体育倉庫から二発の『ピストルズ』を乗せた弾丸が急接近して来た。

「なーーーーー!」

鳥間が驚く間に、弾丸は二人との距離を縮めていく。

《イイイイツー!》

《ハアアアアーツー!》

その弾丸は二人の間で均衡しているナイフの根本を打ち壊し、空へと消えていった。そして、ナイフの接合していた部分が破壊された事により、刃が鳥間の胸へと落ちた。

あたりに静寂が流れる。ワンテンポ遅れて、生徒たちが一斉に声を発する。

「当たった!」

「すげえ、ビッチ先生残留決定だ!」

「さすが私の銃悟君!」

「は?」

「あ?」

そして、ロヴロがイリーナに近づいて行く。それを不安そうな表情で伺うイリーナ。

「出来の悪い弟子だ」

「ッ!」

「…先生でもやってた方がまだマシだよ。……必ず殺れよ、イリーナ」
笑みを浮かべ、そう言うロヴロ。

「……はい！もちろんです！」

こうして、この事件はひと段落ついたのであった。

はあく〜っ。疲れたー。…ん？あ、どうも銃悟です。あの後、イリーナ先生は教師としてここに残ることを許されたみたいだ。

…え？なんでそんなにあいまいなのかだって？…イヤ、体育倉庫で弾道予測してくれてた律に捕まったんですよ。すげービツクリしたねー。だって完璧にラリった顔で「銃悟さん…？今私たちのほかに、誰も居ませんよ…？」って言うんだもん。それで反応に困ってたら何故か俺のスマホから機械の手が出てきて俺を抱きしめるんだぜ？

…人生初のハグが自分のスマホで。ハハッ、ワロス。
しかもその後、体育倉庫に入ってきた神崎と片岡が自分のスマホとハグしてる俺を見てゴミを見る感じだったからなー。これももう終わったなー。(白目)

…と、そんなこと言ってる間にもう学校だ。今日は一時間目から英語だからな。元気よく行こう。

「おはよーっす！」

そこに居たのは、複数人の生徒と、イリーナ先生だった。

「あら、おはようジューゴ。…そうだ。アンタに渡せて言われたものがあつたんだった」

そういうと、胸の谷間から手紙を出すイリーナ先生。

…わかった。胸をじつと見たのは悪かったから、自分で胸を寄せる

な陽菜乃。ドキがムネムネします。

絶景から目を晒し、手紙を開く。……………

「あのクソジジイ……！そういう事だったのかよ……！」

俺の呟きにイリーナ先生が反応する。

「そういう事？……一体何なのよ」

『いや、実は……』

「おはようございまーす！あれ？イリーナ先生、英語一時間目から
だっけ？」

元気よく扉を開けて入ってきた矢田に、俺の発言は遮られたのだっ
た。

……ま、いいか。俺は窓を開けて、手紙を紙飛行機にして飛ばす。風
に飛ばされる手紙。そこに書いてあったのは……

〔今度元気に帰ってこい。〕

パッショーネ一同〕

俺の家族からの、あまりにも短く、それでいて優しい言葉だった。

二人目の時間

はいはい、どうも銃悟です。今日も出席日数確認（暗殺）を無事終えました。いつも通りに避けられた今日この頃。このヤロー。（韻踏み）

「烏間先生から転校生が来ると聞いていますね？」

そう。昨日の夜、烏間先生からメールが届いた。その内容は、転校生がE組に来るというものだった。…だいたいこの時期に来るつてなると、やつぱり暗殺者だろうな。

「律さんの時は少し甘く見て痛い目を見ましたからね。先生も今回は油断しませんよ」

「そーいや律、何か聞いてないの？同じ転校生暗殺者として」
原の質問に答える律。

「はい。…初期命令では…私と『彼』の同時投入の予定でした。私が遠距離射撃、『彼』が肉迫攻撃…連携して殺せんせーを追い詰める」と
ふーん…肉迫攻撃…本当に通用するのかあ？…だつて殺せんせーだぜ？よほど鍛えたりしねーと…それこそ、体のどこかを改造するのかなあ…ツ。

「…しかし、二つの理由でその命令はキャンセルされました」
「なんで？」

誰かがそう聞くと、律は苦笑気味に俯きながら答えた。

「ひとつは、『彼』の調整に予定より時間がかかったから。もうひとつは——、私が『彼』より、暗殺者として圧倒的に劣っていたから」
それを聞いた教室内に戦慄が走る。

「私の性能では…『彼』のサポートをつとめるには力不足だと」

あの律を圧倒的に凌ぐ程の強さ…。いったい、何者なんだ…？
そう考えていると、不意に教室のドアが開かれた。

——来た。

みんながドアに視線を集中させる。誰かが固唾を飲む音が聞こえ

た。そして、外から入って来たのは――！

「……………」

白装束を身に纏った、いかにも怪しい男だった。その男は何も言わず、右手を上げる。そして――

ポンツ！

突然、鳩が手のひらに現れた。……これは……………

「ははは、ごめんごめん、驚かせたね。転校生は私じゃあないよ」

白装束は朗らかな雰囲気を出しながら自己紹介をする。

「私は『保護者』だよ。……まあ、白いし、『シロ』とでも呼んでくれ」

……なんだこいつ。おかしいぞ。

「いきなり白装束で来て手品やったらビビるよねー」

「うん…殺せんせーでもなきや誰だつて…」

その殺せんせーは液化化して天井の隅にへばりついていた。いやめちやくちやビビってんじやあねーか。

「初めましてシロさん。…それで、肝心の転校生は？」

「初めまして殺せんせー。ちよつと性格とかが色々と特殊な子でね…私が直で紹介させてもらおうと思ひまして」

はい、これおくりもの。と、殺せんせーに羊羹を渡すシロ。それに笑みを浮かべ、喜ぶ殺せんせー。それでいいのか。

「では、紹介します。おーい！イトナ！入つておいで!!」

今度こそ来る…！俺たちはドアを再度見つめる。そして数秒後――

盛大な音が、教室の後ろから響いた。即座に後ろを向くと、今まで誰も座っていなかった席に、見知らぬ少年が座っていた。

…いや、壁壊すなよ。ドアから入れよなあくツ。

「俺は…『勝った』。この教室の壁よりも強いことが証明された。『それだけ』でいい…。『それだけ』でいい……」

なんだこいつ。頭パープリンなのオウツツ？また変なのが増えたよこのクラス。(他人事)

「堀部イトナだ。名前で呼んであげて下さい。…ああ、それと。私も少々過保護でね。しばらくの間彼のことを見守らせて貰いますよ」

シロがそう言い、その場は静まる。しかし、ある人物が転校生に話しかけた。

「ねえ、イトナ君。ちょっと気になったんだけどさ？今、外から手ぶらで入って来たよね？——外、どしや降りの『雨』なのに、なんでイトナ君一滴たりとも濡れてないの？」

…確かに。カルマが言った通り何か奇妙だ。その指摘を受けた転校生——イトナは、クラスをキョロキョロと見回す。そして俺の姿を見て、指を向けた。

「…お前は、たぶんこのクラスで一番『強い』。…けど安心しろ、俺より弱いから…、俺はお前を殺さない」
「……………」

「俺が殺したいと思う奴…。それは、俺より『強い』かも知れない奴だ。この教室では、殺せんせー。あんただけだ」

「強い弱いとは喧嘩のことですかイトナ君？…力比べでは先生と同じ次元には立てませんよ、ヌルフフフ」

羊羹を食べながら顔の表情がしまし模様になる殺せんせー。…腹立つ態度なんだけど、言ってることは事実なんだよなあ。腹立つけど。

その言葉を聞いたイトナは、殺せんせーが食べている羊羹と同じものを取り出す。

「立ってるさ、——だって俺たち、血を分けた兄弟なんだから」

兄弟宣言した後、イトナは壊した壁から何処かに行ってしまった。いや壁直せや。その後、みんなは殺せんせーを質問責めにしていた。しかし、殺せんせーは知らないという。

まあ、確かにあの外見で兄弟つてのは難しいとは思うが…。

「にしてもなあッ。似すぎなんじゃあねーのかよ、アレは」

俺の視線の先には、殺せんせーと同じグラビア雑誌を読むイトナがいた。あの後、しばらくして戻って来たのだ。その机には、大量の甘いものが置かれている。…あ、全部食べ終わった。

「ねえ、鷹田君。あの転校生、本当に今日殺せんせーを殺すのかな？」

片岡が弁当を持ってこちらにやって来る。…途端に周囲から殺気を向けられる。ちよつと待って下さいや。俺が何したって——スマホ熱つつ!?! オイ律ちよつと待て俺のスマホから湯気出てるんだが!?!

——あいつ、本体から直接スマホいじりやがったなッ!?!
俺が突然熱くなったスマホを取り出して机の上に置くと、片岡がまた話しかけてくる。俺の隣に来て。

「ねえ、鷹田君？他の人に気を取られて無いでさ——、こつち見てよ。ねえねえねえ」

うわあい。いつの日か見たハイライトさんがどこかに行ってしまった濁った瞳だあい。…片岡に限らず、この時の女子には何かやると言ったらやる、『スゴ味』がある。何でだ。

俺が考察をしていると、不意に自分の右腕が柔らかな物に包まれた。それに目を向けると、未だハイライトが灯っていない潤んだ瞳でこちらを見ながら、俺の腕を抱きしめている片岡がいた。

「何でそんなに無視するの…?…も、もしかして私のことが嫌いに

なった？——嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!ダメなところがあつたら直すから!鷹田君が望むこと何でもしてあげるから!……だから、私を嫌わないで……!」

「オーケー、ストップだ片岡。ちよつと落ちつけ。というか落ち着いてください」

やんわりと肩を掴むと、片岡に言い聞かせる。

「あのな?俺は別に片岡のことを嫌ってるわけじゃあねえ。むしろ好意的に思ってる」

「ふえっ!」

そのキザったらしい言葉に顔を赤く染める片岡ア!そして嘸し立ててくる外野ア!(前原)強くなつて行く殺気イ!今さつき何かの部分が飛んでつた俺のスマホオ!

「:さつきののは、ちよつと片岡のことを考えてただけなんだ。無視とかそーいうのじゃあない。それに、俺たちの事をいつも考えてくれる片岡を嫌いになるわけないだろ?」

つかあゝッ!どこの色男だよお前はア!?!恥ずかしいとは思わないの?生きてて。(倒置法)

そんな黒歴史をまた一つこの世に刻んでしまった俺に、さすがの片岡も俺の目をじつと見つめて動かない。見ろよあの口元。満面の笑みじゃねーかよ。嘲笑われてんのか、ハハッ!!(名推理)

「:俺、女の子達は好きだけど、こんなハーレムは嫌だなあ:」

オイコラ前原お前後で覚えとけよ。

はてさてご飯も食べ終わり、俺たちは机を移動させている。:え?何でそんな事してるのかって?:イトナと殺せんせーが今から決闘するからなんだよ。何でもシロがそうしてくれって頼んだんだ。俺は誰に説明をしてるんだろう:。(戦慄)

そして、イトナと殺せんせーが机のリングの中に入る。するとシロ

が殺せんせーにある提案をする。

「ただの暗殺は飽きてるでしょ殺せんせー。ここはひとつ、『ルール』を決めないかい？…リングの外に足がついたらその場で『死刑』！…どうかな？」

「…なんだそりや、負けたって誰が守るんだそんな『ルール』」

「——いや、みんなの前で決めた『ルール』は…破れば先生としての信用が落ちる。…殺せんせーには意外と効くんだよあの縛り」

杉野の言葉にカルマが答える。…なるほどな、いい性格してやがるぜ。殺せんせーがカルマが言った通りの性格だとしたら——。

「…いいでしょう。受けましょう」

やっぱりな、…つたく。わざわざそんな事しなくても俺たちが信用を無くすわけねーってのによ。

殺せんせーの返事を聞いたシロは、満足気に頷いて、そして右手を上げる。

「…では合図で始めようか。暗殺——」

張り詰めた空気が辺りを支配する。その場の誰もがリング内にいるふたりに注目する。そして——シロが、右腕を振り下ろした。

「——開始」

その合図が出た瞬間——。

殺せんせーの触手が一本、『何か』によつて切断された。

皆の視線は『ソレ』に固定される。本体から分離され、トカゲの尻尾のようにビチビチと跳ねる触手に——ではなく。

イトナの頭の辺りを音を立てて移動している『ソレ』は——、

『触手』ツ!？」

殺せんせーの武器でもある『触手』。それがイトナの頭と同化していた。：うそだろ、何でなん——ツツ!？」

突如、辺りにとてつもない寒気が漂う。すると殺せんせーの顔色が文字通り変わっていく。黄色から——ドス黒い色へ。：こ、この色はッ!？」

「どこで『ソレ』を手に入れたッ!!その『触手』をッ!!」

「——渚。あの色って——」

「う、うん。『黒』は、殺せんせーが怒った時、の色なんだけど——何で怒ってるんだろう：?」

今の殺せんせーは誰がどう見てもキレている。：しかし、『どこで手に入れた』、か——。『何故触手がある』じゃあないんだな。

「：シロさん。どうやら貴方にも話を聞かなきゃいけないようだ」
「聞けないよ、死ぬからね」

そう言い、シロは袖の間から光を出した。

その光線を浴びた殺せんせーは、何故か動きを止めた。さらによく見ると、流線を帯びていた体は、どこかカクカクした歪な形となっている。

「この圧力光線を至近距離で照射すると、君の細胞はダイタラント拳動を起こし、一瞬全身が硬直する。——全部知っているんだよ。君の弱点は全部ね」

その言葉と同時に、イトナから無数の触手が繰り出された。

「死ぬ、兄さん」

そして——殺せんせーの体は、その触手に貫かれた。

「殺ったか!？」

村松がそう叫ぶ：がしかし、寺坂は冷静に答えた。

「…いや違う、上だ」

その言葉に皆が上を向くと、蛍光灯にぶら下がって荒い息を整えている殺せんせーがいた。

『脱皮』か…そういえばそんな手もあったっけか」

それを見たイトナはまた触手をヒュンヒュンと動かし始める。そして再び触手で殺せんせーを襲い始めた。

『その『脱皮』は見た目よりもエネルギーを消耗する。よって直後は自慢のスピードも低下するのさ。常人から見ればメチャ速いことに変わりはないが、触手同士の戦いでは影響はデカいよ』

確かにイトナの攻撃が少しとは言え確実に当たっている。必要最低限の防御はしているようだが、その頻度が多くなっていた。

「加えて、イトナの最初の奇襲で腕を失い、再生しただろ？それも結構体力を使うんだよ」

そして、シロは次々と殺せんせーの弱点を暴露していく。

「また、『触手』の扱いは精神状態に大きく左右される。予想外の『触手』によるダメージでの同様、気持ちを立て直すヒマも無い狭いリング。…今現在どちらが優勢か。生徒諸君にも一目瞭然だろうねー」

「お、おい…これマジで殺っちゃうんじゃないのか…？」

誰が言った言葉だろうか。全員がイトナのその強さに戦慄し、そして念願の殺せんせーの『暗殺』を達成できる――。

しかし、生徒たちの顔に浮かぶ表情は、何故か良いものではなかった。…こいつはマズイな。

「更には、献身的な保護者の――ッ！」

そう思った俺はシロの袖の中にある機械に向け、発砲するのだった。

それは、突然だった。僕の横で銃悟くんが発砲したのは。その音に周りのみんなも驚く。

「おいテメー、何俺たちの『獲物』横からぶんどろうとしてんだコラア！それにお前らもだ！目の前で『獲物』取られそーになつてんのによお〜、ボケーつとして見てんじゃあねーぞ!!」

その言葉に僕たちはハッ、となる。…そうだ。さつきからずつと感じてたこのもやもやは、『悔しさ』だったんだ。急に出てきた人が、僕たちが頑張つて集めた『努力』を一瞬で追い抜いたから。

…そんなんじやあ『駄目だ』。僕たちには『飢え』が足りなかった。何が何でも『殺してやる』という、気高き『飢え』が足りなかったんだッ！『飢え』なきやあ、殺せないッ！

「……！殺せんせー！負けないで！」

気づけば、声が出ていた。暗殺者が、ターゲットに応援するなんて言語道断かもしれない。しかし、自分たちが『殺す』という気持ちは全員同じだった。

「何してんだよ、そんなぼつと出の奴にやられてんじゃあねえぞ！殺せんせー！」

「殺せんせーを殺すのは私たちなんだから！」

「殺されたら一生エロ本見れなくなんぞ!?!」

…ひとり、変なのが居たけど、それでもこのクラスが一つになった。それを見た銃悟くんは満足気な表情を見せた。…やっぱり頼りになる男だ。

「…くだらない」

すると、壊れた機械を捨てながらシロさんが呟いた。

「君たち、何か勘違いをしていないかい？これは競い合う『スポーツ』

じやあ無いんだよ。れつきとした『暗殺』さ。誰が殺したか関係ない。最後に笑うのは結局。そいつを殺した者が笑うのさ！それを『死なないで』だと？ハッ！反吐が出る」

シロさんの雰囲気が一変し、低い声色で吐き捨てるように言う。そして、銃悟くんに向かって言葉を放った。

「…やはり、群れでしか行動できないチンピラに道徳を教わった君も、ただの馬鹿だったようだな」

「……………あ？」

『社会のクズ』に君は救われたんだっけ？君もかわいそうだね、鷹田銃悟くん。あんな『麻薬』を売ってた組織に拾われるなんて」

「……………」

「確か…組織名は——『パツシヨ—ネ』——」

その時、シロさんの右頬に弾丸が掠って飛んだ。…え？…待ってくれ。彼は…決して生きてる人の『頭部』とか、『弱点』を狙わなかった筈だ…！『手』とか、『足』とかの筈…なのにツ！

「……………そういやあよく、ある人からの受け売りなんだがよく。アンタら、『覚悟して来ている人』…だよな」

静まりかえった教室に、銃悟くんの冷たい声が響く。

「人を『始末』しようとしているってことは、逆に『始末』されるかも

しれねーつつー『覚悟』をしてるってことだよなあゝツ」
「……何が言いたいんだい？」

「まだ分かんねーのかあゝゝツ!?!『ぶっ殺す』つつつてんだツこのスカ
タンツ!!」

その怒りの形相を浮かべた彼の瞳には、黒く、そして昏い炎が映っ
ていた。

イトナと戦おう！の時間 その一

『覚悟』：…ねえ？君みたいな若い子を再起不能にするのに『覚悟』なんかいらなと思うんだけどなあ」

「そのよく回る口を閉じた方がいいぜ。手元が狂って、『不幸な事故』が起ころうかもしんねーからなあ〜ッ！」

肩をすくめるシロに銃悟は鋭い視線を向ける。その手元にある拳銃は怒りで微かに震えていた。

「…すぐ感情的になってしまうのも暗殺者としてどうなのかなあ〜ッ、君。それで拳銃の狙い、定めれるのかい？」

目ざとくそれを発見したシロはくつく、と笑う。それを見かねた殺せんせーが銃悟の近くへ移動した。

「銃悟君、冷静になつて下さい。君がこんな事をする必要は無い。ゆっくり…落ち着いてその銃を収めるんです」

殺せんせーが銃悟を諭そうとする。しかし、銃悟はそれに応じる事はなかった。

「…確かに俺の家族は褒められた人たちじゃあねー。むしろもう何もかもがなくなった、崖っぷちまで追い詰められた奴らの集まりだ。…でもな。そんな奴らでもな、…俺の家族なんだよ。——大事な家族をコケにされてよお〜ッ、黙ってるなんざ俺には出来ねえぜ」

その言葉と同時にシロの頭に照準を合わせる。その拳銃はもう、震えてはいなかった。

「殺せんせー。銃悟君は自らこのリングに上がってきたんだ。生徒を傷付けないという約束は守るのが難しいんだがね…」

そのシロの言葉に逡巡する殺せんせー。しかし、隣の銃悟の姿を見て、ゆっくりと口を開いた。

「…分かりました。これ以上言っても聞かなそうですからね…。銃悟君、もちろん先生は君を守ります。しかし、もしも自分の身に危険が迫っていると感じた瞬間にその場から離れて下さい」

その言葉に頷く銃悟。そして、周囲には張り詰めた空気が漂う。静まり返る教室。周りの生徒の一人が固唾を飲んだその瞬間——。

《同時攻撃ダアーツ！》

《ウシャアーツ!!》

そして『N.O. 1』、『N.O. 2』が共にイトナへと弾丸を蹴り出した。しかし、それにもイトナは動じる事なく――

「――シッ！」

銃悟に急接近。触手をバネにし、大きく飛び上がりながら銃悟に蹴りを放つ。それを見た殺せんせーはイトナと銃悟の間に入り、その蹴りを受け止める。

ゴシャアツ！という音と共に殺せんせーの体が僅かに浮いた。

「うつぐ……！」

呻く殺せんせーに構わずに連続で蹴りを見舞うイトナ。しかしそれは銃悟がイトナへと弾丸を打ち込んだところで止めさせられた。今度は教科書で弾く事もせず屈むことで弾丸を回避。そしてバツクステップで距離を取る。

「すまねえ、殺せんせー！大丈夫か!？」

「え……ええ、さっきの羊羹が出るところでした……」

「結構余裕あるのもしかして!？」

ツッコミながらリロードしていく銃悟。その傍らには『ピストルズ』の全員が漂っていた。

《ドウスンダジューゴーツ！アイツニ俺たちノ攻撃ハ効イテナインダゼーツ!?!》

《速スギルンダヨナアーツ！アイツノ頭ノ『触手』ツ!》

《シカモ『動体視力』モズバ抜ケテタヨーツ！至近距離ノ弾丸ヲ避ケルナンテサアーツ》

「ああ……分かってるさ……！」

そう答える銃悟だが、心の中では必死に次の策を考えていた。

（どうする……！ヤツには中距離の弾丸は効かねえ！だからといって『触手』を狙おうにも意味が無い……！しかも本体が超人的な『動体視力』だと……ツ！無茶苦茶じゃあねえかッ！）

どの手段から狙おうにも、すべての攻撃が通用しない。そんな絶望

的な状況に陥ってしまった。今はまだ殺せんせーが居るから銃悟の安全はあるが、このままだとジリ貧だ。

焦る銃悟。それを見たシロはくぐもった笑い声を上げる。

「焦ってるねえ銃悟君。私のイトナは完璧だろ?…それにしても君のその『スタンド』…。中々興味深い。君の体を解剖すれば何か分かるのかな?」

「殺せんせー、行けるか?」

「ええ。まだまだやれますよ」

ゆつくりと近づいてくるイトナを目前とし、二人は身構える。

(とりあえず今は手探りで弱点を探すしか——)

そう銃悟が考えたその時。教室にひとりの声が響いた。

「銃悟君ツ！殺せんせーの弱点ツ！『テンパるのが意外と早い』ツ！」「ああ!」

その声の主は片手にメモ帳を持った潮田渚であった。突然の発言に全員が困惑する。それは銃悟も同じであった。

(なんでこんな時にそんなふうでもないこと言うかなあツ!?殺せんせーの弱点つたつて、相手はイトナなんだよツ！せめて『触手の弱点』とか——)

(『頭に小さい先生がいると思ってください!』)

その時、銃悟の脳裏に一つの引つ掛かりが生まれる。

(——いや待てよ?…殺せんせーと同じ触手?…殺せんせーと同じ——だと?)

そしてその引つ掛かりは、一つの『策』として生まれ変わる——!

「…やってみるか…。『やらない』で後悔するより、『やった』後の方が『くい』が残んねーからなあツツ!」

『覚悟』を決めた銃悟。その手元にある紫色の拳銃が鈍く輝いた。